ExistenceDualism ―存在二元論―

かつおだしうめえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＥｘｉｓｔｅｎｃｅＤｕａｌｉｓｍ　―存在二元論―

【Ｎコード】
Ｎ８６０８Ｙ

【作者名】
かつおだしうめえ

【あらすじ】
※読むと健康に害を与える可能性があります。気分が悪くなった場合は使用を中止し、医者に相談しましょう。

0・名前も忘れられてしまった女子高生の夢

グレゴール・ザムザは幸運だ。
自分が毒虫であることにすぐに気付けたのだから。

0・名前も忘れられてしまった女子高生の夢

確かに昨日までのあたしはその中にいた。
ありふれた学校のありふれた生徒のありふれたグループ、その中にいた。
成績に趣味、性格。共通するものは何でもよかった。ううん、全部共通させた。
たまにどうしても同じになれない子がいたけど、そういう子は例外なくいじめられた。あたしもいじめた。
だって同じになれないことは悪なんだから。
とにかく同じになるように努力した。進むことも下がることもなく常に皆と同じでいられるように。
昨日までのあたしのやり方に間違いなんてなかったはずだ。
なのにどうして今あたしは外にいるのだろう。教室や学校の外なんかじゃない、絶対に行きたくなかった本当の外に。
最初は気付かなかった。ううん、気付きたくなかったんだろうな。
通学路を歩き、学校へ。靴を履き替え教室へ。いつもどおりの日常。
だからいつもどおりに教室の扉をあけていつもどおりに「おはよー」と挨拶した。いつもどおりに教室には何人かのクラスメイトが

いたんだけど……いつもどおりなのはそこまでだった。
「ねぇ、聞いてよー！　昨日買い物の帰りにさー、すっごい格好の女の子とぶつかっちゃって。ふわっふわの白いレースのドレス着た女の子なんだけよ、暑いのによくそんな格好できるよね。ロリ臭い傘まで差してて、コスプレ魂ってやつかなー」
今日はこの話題で盛り上げようと思ってた。失敗しないように何度も繰り返した。つまらないことかもしれないけど、失敗しないことも努力の一つなんだ。
「……えっと、すいませんよくわからないんですけど……」
返ってきたのは視線をそらしながらの遠慮がち、ううん、よそよそしい言葉。
「何よー、その他人みたいな話し方はさ！」
「え、だって……」
他人じゃないですか、と目の前の仲間である彼女はそんな顔をしていた。
「あの、あたしの名前、知ってるよね……？」
「あ、はい、それはもちろん……」
彼女が答えてくれたのはもちろんあたしの名前。ただしその後に「なんであたしこの人の名前知ってるんだろう……」という呟きつきで。
嫌われちゃったのかなー。それともいじめのターゲットなのかな。
ま、いいや。
とりあえずホームルーム始まるし、席すわっとこ。
昨日までの仲間達があたしの方を見ながらひそひそと話をしている。
にらみ付けると怯えたように視線をそらす。中には明らかな敵意を持ってにらみ返して来る子もいるけど。
うわ、やっぱりいじめだよこれ。
ハゲ担任は嫌いだけど相談するしかないのかな。でも学校に行かなくていい理由ができたからいいのかな？

なんて思ってたらハゲが教室の扉をガラっと開けて入ってきた。
教室をいやらしい目でじろじろ見てる。女子高生ばかりだからってわかりやすいんだからさ。
ハゲの視線はあたしの席でぴたりと止まった。
ちょ、ハゲ、見んな……って……。
あたしが教室の中にいたのはそのときまで。
教室になんていられなかった。
あたしは扉を開けて廊下の外、校門の外へ逃げた。
ハゲの視線はあたしの元友達と同じ目をしていた。
上履きのまま学校の反対へと走る女子生徒に周囲の人々は注目の視線を向けてくる。
やめてそんな目でみないで。
誰でもいいからあたしを仲間にいれて。
走って走って住宅街の真ん中にまでやってきた。空は明るいのに歩いている人間は誰もいない。朝だけど学生やサラリーマンはみんなそれぞれの場所に行った時間だからだ。

「ごきげんよう」

後ろからの声。とてもかわいくてふわふわした声。そして懐かしい言葉。いつもの朝だったら欲しがることもなく聞こえたはずなのに。聞かないふりして走り去るなんて無理だ。
振り返るとそこには、ああ思ったとおりだ、白いレースが重なったドレスを着た女の子がいた。中学生くらいの身長なのに甘ったるい服装のせいで小学生にも見える。
長い髪を風になびかせている姿はまるで人形のよう。話のネタにした白い傘さえ立派なオブジェクトに見える。
もしかしたらあたしは夢を見ているのかな。
本当はまだベッドで遅刻しそうになるくらい寝ているのかな。
そうだったらいいのに。

あたしより小さな彼女はぱたぱたとあたしの胸元にまでやってきて白く生気がない顔で見上げてきた。
なぜだろう。
そのときあたしはものすごくこの細い首をへし折りたくなった。
知らずに両手が伸びていた。
だけど掌が指が少女の首に届く前に
「あなた、とてもかわいそう」
という言葉に凍り付いてしまった。
「あ、あたしがかわいそうってバカじゃないの！？」
「だってあなた、お友達がいなくなったんでしょう？　全員。かわいそう。とてもかわいそう、かわいそう」
かわいそう、かわいそうといいながら少女はころころと笑った。
やっぱり殺しとけばよかった。
だめ、殺すだけじゃ足りない。
長くて艶のある髪を引きちぎってガラス玉みたいにきれいな瞳に指を突っ込んでかき混ぜてつぶして、それから、それから……
「でもお友達なら私が紹介してあげるから心配しないで」
「友達……」
なんて甘い言葉。
目まいがするほどに。
そうだ、あたしが欲しかったのはこの言葉だ。
誰でもいい、あたしを仲間に入れて。
「あなたが欲しいのはこのお友達？」
本当にそれまで誰もいなかったはずなのに
いつの間にかドレスの少女の隣に真面目だけど暗そうな大学のお姉さんが立っていた。
「それともこのお友達？」
次に隣に現れたのはズボンを腰で履いて口にピアスをした怖い感じの男の人。
全員バラバラ。どんな関係なのかも想像できないくらいに。

なのにみんな同じ笑い方をしている。ドレスの少女と同じ、残酷な笑いを。
「それとも私がいいのかしら？」
どこかの童話のようなことを言う少女。
「あ、あた、あたしは……」
どんな人でもいい。人でなくてもいい。
あたしは一人になりたくない。
一人になったらきっと死んでしまう。だから、だから
「そう、一人になりたくないのね」
「な、なんで、言ってないのに……」
「うふふ、大丈夫。誰もあなたのことを責めない、誰もがあなたに賛同するすてきな世界に連れてってあげる。だから、抵抗しちゃだめ」
「え？」

そこから先は何も考えられない。

だってあたしの存在は消えてしまったんだから。

●

くすくすとドレスの少女は笑った。
そこには少女以外の姿はない。
「新しいお友達が増えたわ、みんな」
誰もいないはずなのに誰かと話し続ける少女。
傍から見れば気がふれたとしか思えない。
が、それよりも恐ろしさを感じる。
敵意を怒りを恐怖を侮蔑を、ありとあらゆる負の感情を少女にぶつけたくなる。

殺意のままに犯したくなる。

彼女が人間だなんてきっと誰も思わない。

アンチカテゴリについての私論

アンチカテゴリについての私論

ケース１：十六歳　高校生（女）の場合
発症したと思われる日に登校するものの友人と会話を交わした後に校外へ出る。その後の行方は不明。一月後に出欠簿をまとめていた事務員が失踪に気付く。患者と顔を合わせていた生徒や教職員、患者の両親などは患者の失踪に気付いてはいたが口をあわせてこう言ったという。
「もう一度会ってしまう機会を持つくらいならなかったことにしたい」
最もよくあるケースだ。

ケース２：十九歳　短期大学生（男）の場合
彼の発症は学内で実験を行っているときであった。その場にあった教授を含む複数の人間から硫酸、硝酸等の劇薬を被せられて死んだ。大学のサークル長を務めるほど皆に慕われていた人物だった。敵意を抱かせる病気ではあるが実際に殺されるケースは珍しい。
どうやら患者と関わりの濃い人間程殺意も濃くなるようだ。

隔離心象彷彿症候群。

通称アンチカテゴリ。（読者にわかりやすくするために以降この名称を使用する）

自分と関わりのあった人間に疎外感、もしくは激しい敵意を抱かれる。

本人に発症の自覚はなく、また直前まで発症の前触れなどはない。発症に至るメカニズムも不明であるが少なくともウィルスなどの流行性ではないと思われる。

新しい精神疾患だと論ずる学者もいるが私は遺伝子もしくは脳髄に原因があるのではないかと考える。

そのためには患者を調べる必要があるが病症故に患者本人に会うことは難しく、また政府による患者の保護も行われているため（保護された患者は政府監視下の保護施設に送られる）私個人の力だけでは面会は難しい。

アンチカテゴリを自称するもの、他薦で疑いのあるものをみたことはあるが、どれも本人か周囲の性格、環境に問題があるだけでアンチカテゴリ患者ではなかった。

この病気を理解するためには政府だけでなく社会全体の協力が必要だろう。

1・気弱な中学生　鈴平亮一の夢　―1

人は生まれながらにして幸福へと努力する生き物だ。
たとえそれが間違った選択だとしても。

◆

びり、びり、びり。
びりびりびりびりびりびりびりびり。

僕は常に努力してきた。
何にって、本当は僕にもよくわかっていないのかもしれない。

しゃーっ、びりびりびり。

あえて言うのなら幸せにだろうか。
自分から不幸になろうとする人間はたぶん、いないと思う。

びり、びり、びり……。

夕方、カーテンを閉め切ったくらい部屋の中。
僕は教科書を切り裂いていた手を止めた。
見たこともない芸術家の顔が半分に裂けていた。どんな作品を残したかなんて知らないけどたしか死後になってようやく認められた人じゃなかっただろうか。
生きている間に認められない人生なんて意味がない。

（それはきっと僕自身にも言えることだ）

どこで選択を間違ったんだろう？
どこでどんな努力が足りなかったんだろう？
僕の視線は知らずに壁に貼られた一つの新聞記事に向かった。日付はちょうど半年前。

その事件のことを思い出す。

『男子中学生ひったくりを捕まえる！』

半年前、僕は友達とゲームセンターに行った。普通の男子中学生として本当に標準的な行動だ。勉強しないで中毒患者のように通いつめたり、遊ぶ金欲しさに年下の子を脅したわけじゃない。
この選択は間違ってないはずだ。
適当に新作ゲームを遊んだ後、どこに行くか友達と話しながら店を出た。もちろんこの選択も間違ってないはず。
だけど聞こえてきたのは
「きゃ――ッ！　あたしのカバン返して！」
というかん高い声。
思わず振り向いた。サングラスにニット帽という怪しい男が女物のバッグを片手にこちらに走ってきていた。店から出たばかりの僕達には気付いていない。
避けるなんて選択肢はなかった。
別に僕は極端な運動オンチじゃない。
でもアレを避けられるのは運動系の部活で相当反射神経を鍛えてる人だけだろう。記憶の誇張はあるかもしれないけど、と僕は思い返す。
タックルに近い姿勢の男と何もできずに固まってしまった僕。
バスン、ごろごろごろごろ。
重さと痛みと転がる視界と耳にがんがんと響く音のせいで一瞬だけ思考が飛んだ。

「て、てててっ」
頭を押さえて瞼を開けるとそこには顔を真っ赤にした男がいた。
邪魔された、と思ったようだ。
「てめぇ、よくも！」
男は拳を振り上げた。僕は手を目の前にかざして瞼を閉じた。せめて怖くない選択肢をとったつもりだ。だけどいつまでたっても痛みは降りてこない。
そっと瞼を開けた。
男の後ろに紺色の制服を着た警官が立って男の手首をしっかりと握っていた。近くの交番から警察官が駆けつけていた。呆然としたまま男が連れて行かれるのを見送った。警察官の人が僕にも来るようにと声をかけた。
……その後のことは興奮でよく覚えていない。
警察署に呼ばれて小さな盾の表彰状をもらった。新聞記者がたった一人だけど取材に来てくれた。少しがっかりした。二、三人くらい来て芸能人のインタビューみたいになるのかと思ってたから。今思うととんでもない勘違いだ。
家に帰れば父さんや母さんに褒められ、父さんにいたっては
「お前は俺に似てしっかりした子だ」
と褒めているのか自慢しているのかわからない言葉をくれた。
それでも学校ではたいした事件だったらしい。朝の集会のときに校長に呼ばれて全校生徒の前で褒められた。
皆の前で照れながら挨拶した。違うクラスの子が教室まで僕の様子を見に来た。
そうだ、やっぱりここまでの選択肢も間違ってないはずだ。
少し位置がずれていたら友達の方がヒーローになっていたかもしれない。だけどそんな不確定要素がわかる努力なんてできるわけがない。
そして忘れずにちゃんと言ったはずだ。
たいしたことじゃない、偶然だって、何度も何度も。

言ったはずなのに。
……ヒーロー扱いは一週間の間だけ。
「偶然犯人とぶつかっただけなのに調子にのりやがって」
「自分を人気者なんて勘違いしてるんじゃないの？　気持ち悪い」
「運がいいだけで偉そうにするなよな」

ひそひそと聞こえないようにささやかれていた声は、いつしかわざと自分の耳に聞こえるように隣でしかも大声で話されるようになった。その頃から上履きやカバンが消えはじめた。見つかるのはトイレか焼却炉か花壇の中だ。
校舎の外を歩いていると上からバケツの水を落とされた。臭いし、苦い。わざわざ掃除に使ったあとのを使うなんて準備がいいというか、そこまでやられる覚えはないというか。
「ごっめーん！　お手柄中学生様が歩いているなんて気付かなくてさぁー！」
「存在感がないから犯人にも気付かれなかったんじゃないのー？」
「うっは、ありえる！」
教室に戻って怒鳴り込む気力はなかった。もともとそんな度胸もない。それに怒鳴り込んだとしてもいじめがひどくなるのはよくわかっている。いつからか教師達は問題を起こさないことより問題を隠す方を選択しはじめたから。僕だって明らかに間違った選択肢は選びたくない。
こういうときは親に相談するのが一番だ。
子供いじめられてると知ったらきっと一緒に戦ってくれるはず。
戦ってくれなくても引きこもることくらいは許してくれるはず。
だからほんの少し勇気を出して訴えてみた。いじめられている、学校にはもう行きたくないんだ、と。
僕の話を聞いた両親はなぜか喧嘩をはじめた。

「いじめ？　そんなの知らん。俺には関係ない」
「なによいつもいつもそんなふうに全部あたしに押し付けて！　この子がひきこもりになっていい学校行けなかったらあなたのせいなんだからね！」
「なんだと！？　俺は会社で働くという義務を果たしてるんだ。お前も主婦なら義務を果たせ！」
「あたしだってパートで働いてるわよ！　だいたいあなたの仕事って冷房が効いた会社でインターネットするだけじゃないの！　いいわよね、あたしもそんな楽な仕事で高い給料もらいたいわ。ああ、ごめんなさい、そこまで高くないわよね」
「なっなんだと！？　お前だって寝てテレビ見てるだけじゃないか！」
「あなたがそんなふうに自分の都合のいいとこしか見ないからこんないじめられるような子に育っちゃったのよ！」
「人のせいにするな！　だいたい俺の子がいじめられるわけないだろ！　どこの男の血をひいてるんだ！？」
似ていると言ったくせに。
言うとよけいに怒鳴られそうだからやめておいた。でも結局目つきが気に入らないという理由で殴り飛ばされた。

結局二人は『何もしないこと』を何度も主張して僕を部屋へと追い返した。
そういう選択をしたんだ。
僕に父さん達の選択を変える力はない。

いったいどこで選択を間違えたんだろう。
いじめられる前？
表彰されたとき？
ゲームセンターの前？

――もしかしたらずっと前、生まれることを選んだときかもしれない。

家を出る選択肢も考えた。

でも家を出てもどんなふうに生活すればいいのかわからない。そんな教科書どこにも存在しない。

きっとどこかの駅で保護されて家に戻される結末だ。そして家に引きこもることも許されずに無理矢理学校に行かされる。そしてイジメが再開する。

そして今は殺されたとしても仕方ない病気が存在する。

きっとむごく殺されたとしても誰も何も言わない。きっと真実なんてわからないまま自分も患者の一員にされる。

そうだ、人間は幸せに向かうために生きてるんじゃない。

死ぬために生きてるんだ。

いい学校に入るための勉強も友達にいい顔するための付き合いも、ひたすら親の機嫌を取るだけのつまらない顔も、全部無駄なことだ。

だから僕は僕の人生の教科書と努力の結果を破り捨てている。

教科書もノートも返って来たテストもあの新聞記事も全部、全部。

この部屋は屑だらけ。塵だらけ。無駄だらけ。

無駄なものが散った床に一番の無駄である自分が転がる。

「は、はは、はは……」

むなしい笑いが口から漏れた。

なぜか楽しかった。

楽しいことさえ無駄に思えた。

思うことさえ無駄に思えてそれさえも無駄に……ああ、そういえば一番の無駄を壊すのを忘れてた。

僕は僕を殺すことにした。

◆

壁の時計の針が頂点で重なる頃。〇時。

僕は財布だけ持って部屋の扉を開けた。

足音を忍ばせて玄関に向かう途中、リビングの前。さっき僕をさんざん怒鳴りつけていた父さんや母さんは起きて笑っていた。夜中にやるくだらないテレビ番組をみながら。

全部くだらないことなのに。無駄なことなのに。

そうだ、どうせ無駄なら好き勝手やってやろうか。

例えば台所から包丁を持ってきて後ろからそっと近づき、無防備な首を切り裂くとか。

……きっとそれも無駄なこと。

だからせめて振り向かないように外に出た。

星一つも見えない真っ暗な空。昼間はずっと雨が降っていた。見えないけど、きっと分厚い雲が空一面に広がっているんだろう。まるで自分の心のように。違うのは規則的に立ち並ぶ街灯や家々から漏れる光が足元を照らしていること。

暗闇に迷う選択をすることはなさそうだ。

道行く人の姿はない。時間を考えれば当たり前なんだろう。

途中でコンビニに行きロープと缶コーヒーを買った。

缶コーヒーは怪しまれないために。

ロープは……自分を殺すために。

目的地は家の近くにあるそこそこ広い公園。

昼間は親子連れや外回りの会社員、健康のために歩いている老人でそこそこにぎわってる場所だ。僕だって小学校のときに遊びに

来たことある。
だけど今は夜。昼とは別世界と言ってもいい。
進む歩幅は小さかったはずなのに僕はいつの間にか公園の門の前に立っていた。光る自動販売機の側面に大きな虫がごつごつと体当たりしている。そんなことしてもいつかどこかにたどり着けるわけでもないのに。
僕は早く適当な枝を見つけないと。
首を吊るのに適当な枝を。
白い袋の中からロープを取り出して僕は奥に進んだ。
あーあー、まるでじゃなくて不審者そのものだよ……。
誰かに見られないうちに先に行かないと。
と思っても夜の公園に来る人間なんているわけない。しかも日付が変わった時間に。
きぃきぃと泣くようにきしむ金属音がどこかから聞こえた。
ブランコが風に揺られている音だ、そうわかっているけれど振り向くことなんてできるわけない。
生きていようが死んでいようが何かに出会ってしまったらきっと自分を殺す気なんてなくなってしまう。
……そんなことを思っていたのが悪かったんだろうか。
「ごきげんよう。こんな真夜中にお出かけ？」
声を聞いてしまった。女の子の声を。
み、見ないで逃げようかな、なんて一瞬だけ考えた。
同時に逃げて怖がるのが無駄にも思えた。
だから、振り向いた。
きぃきぃ、と泣くブランコの上
そこにはやっぱり女の子がいた。普通の女の子じゃない、薄い色のドレスを着ている。理由はわからないけど何か違和感を感じる。珍しい格好だから？　それは少し違う気がする、でもやっぱりわからない。
それよりも一瞬だけ、女の子の周りにたくさんの人が見えた。

う、う、ゆ、幽霊？
と思ったらざわざわと風が吹いて木々が揺れた。あ、なんだ木の影だったんだ。いたと思ったはずの人影はいなくなっていた。
でも女の子は残っていた。
幽霊、じゃないと思う、たぶん。
「こんな真夜中にお出かけ？」
女の子は同じ言葉を繰り返した。
「そ、そういう君こそなんでこんな時間にこんなところに」
「私はお友達と遊びにきたのよ」
フリルの少女は乗ったままのブランコを揺らす。重そうなスカートの中身が見えそうになって僕は慌てて視線をそらした。
「女の子がこんな夜中に危ないよ。どんな友達か知らないけど、お家の人が心配してるんじゃないの？」
「どうして？　誰が決めたの？　それに私のお家の人は心配しないわ」
「そっか……」
僕の家族も同じだ。だから深く追求しないことにした。
「あなたも公園に遊びに来たんでしょう？」
彼女はブランコから降りると僕へと駆け寄ってきた。
「……？」
最初に感じた違和感の理由がわかった。
ちっちゃい子みたいな格好にしては身長が高い。僕と同じくらいだ。
「あのさ、君、何歳？」
思わずそんなことを聞いてしまった。
「お年？　十四」
「十四！？」
「そう」
僕と一緒じゃないか……。
この子いったいどういう子？

高そうなドレスを着てるのにこんな真夜中に外を歩くなんて。友達と遊ぶなんて言ってたけどどういう友達なんだろう。化粧が派手な子や頭の悪そうな格好した男と遊ぶ姿を想像してみた……できなかった。だって似合わないよ。

「ねぇ、あなた。あなたの名前は？」

がんばって想像しようとしてるところを、袖を掴まれて引っ張られた。

「えっと、亮一。鈴平亮一」

「りょういち。すずひらりょういち」

音を確かめるように彼女は僕の名前をゆっくり呟いた。

……恥ずかしい。

逃げ出そうにも袖はしっかりと掴まれたままだ。

「そういう君の名前は？」

「私は……私はエス」

少しの沈黙のあとに少女は答えてくれた。

まるで外国人みたいな名前だ。ドレスを着てるのも外国の子だからかな。でもしゃべるのはうまい。

「亮一は何しに来たの？」

「僕は、えっと……」

ダメだ、言葉をつまらせてしまった。聞かれたくないことがあるって言ってるようなものだ。僕だって友達と待ち合わせで、くらい言えばよかったのに。

まさか自分を殺しに来たなんて言えるわけがない。

それに――責められた気がした。

黙りこんだ僕を見てエスは小首を傾げた。そして僕の手元に視線を投げると小さく手をパン、と叩いた。

「わかったわ。公園に遊びに来たんでしょう。だって縄を持ってるもの。縄跳び？」

「え、ええっ縄跳びぃ？」

こんな真夜中に荷造り用のロープで縄跳びか……。筋トレしてる

んですなんて言っても不審者として通報されそう。
しかも遊びに、という言葉が出てきたってことは筋トレじゃなくて、小さな子供がやってる遊びの方か。
どっちだろう。どっちも無理がある。
「そう、縄跳び」
違うの？
じゃあ何しに来たの？
黒いガラス玉の澄んだ目がそう聞いている気がした。
答えられるわけがない。
「……そうだよ、縄跳びしに来たんだよ」
「あら、それなら私と一緒に遊ばない？」
ひかれると思ったのに。……こう来るとは思わなかった。
「え、えっとそれはさすがに……」
「そう。じゃあ少しだけお話しない？」
「話くらいなら……」
縄跳びと比べたらこっちの選択肢の方がいい。
それにエスとは少しだけ話をしたくなった。
エスが再びブランコに腰かけたから僕も隣のブランコに座った。
板や鎖がずいぶんと頼りなく感じる。きっと僕が大きくなっているからだ。
「亮一にはお友達いる？」
「う……い、いるよ」
いた、なんて過去形で話すのはやめた。
いきなり聞かれたくないことを聞かれてしまった。考えてみたら僕は聞かれたくないことばかりだ。ああ、嫌になる。逃げればよかったかも。
「私にもいるわ。私の言うことはなんでも聞いてくれる素敵な子ばかりよ」
くすくすとエスは笑った。無邪気で愛らしく、どこか残酷な笑み。
お姫様の機嫌を損ねた家来は死刑になってしまいました、なんて

絵本のような言葉が頭に浮かんだ。
「僕もエスの友達になっていい？」
なのに僕の口からはそんな言葉が出ていた。
死にたいのか、僕は。自殺しに来たんだけどさ。
「え？」
「や、その、あの、嫌だったらいいんだよ、べ、別にさ、あは、あはははは」
「嫌じゃないわ」
「言うこと聞かないかもしれないよ。素敵でもないし」
「別に聞かなくてもいいのよ。それに亮一は素敵な人よ」
「あ、ありがと……」
出会ったばかりの僕に言うことだ、お世辞だってことくらいわかってる。わかってるけど、こんなにストレートにしかも女の子に褒められたことなんてないから、その、あうう……なんて返せばいいんだろう。
膝の上に置いたままのコンビニ袋がくしゃりと鳴った。
「えぇっと、コ、コーヒー飲む？」
僕は缶コーヒーをエスに差し出してみた。差し出してしまったというか。「君も素敵だね」とか言えばよかった？
……それはさすがに……。
だからと言って缶コーヒー渡したのもかなりおかしい。
ああ、そうだよ！　いじめられてるヤツのコミュニケーション能力なんてこんなもんだよ！　真夜中にロープと缶コーヒー持ってうろうろしてるヤツに求めるもんじゃないんだよ！　……なんてこれじゃ逆ギレだし……。
頭の中で自分を責めてエスを責めてまた自分を責めた。
こんなことが知られたらきっとエスは失望して僕に声をかけたことを後悔するはずだ。
そのエスはというと、
「ありがとう」

微笑みながら缶を受け取ってくれた。いつの間にか力が入っていた僕の肩が安心したからか、すとんと落ちた。
だけどエスは受け取ったあともじっと缶を見つめたままだ。
「ほ、欲しくないなら無理に受け取らなくてもっ」
「いえ、うれしいわ。本当にありがとう」
嘘、じゃないと思う。疑うことは僕の防衛本能が拒否した。
嘘じゃないなら……もしかして開け方知らない？
本当に異国のお姫様だから知らないとか？
「開け方……わかるよね？」
「……ええ」
「だ、だよねっ」
あああ、もうだめだ、めちゃくちゃだ。
できるなら全部やり直したい。リセットなんかできやしない。もしできたら僕は最初からやり直す。そういえばここには自分をリセットしに来たんだった。今更実行する気なんてさんざんそがれてるけど。
「じゃっ、じゃあもう帰るから！」
限界だった。
この場に残って思わぬ選択肢を選び続けるより帰って不貞寝した方がいい、絶対。
ブランコから降りてエスに背を向け、僕は公園の入り口へ歩こうとした。
「亮一。あのね」
「な、何？」
振り返らずに返事をした。
「もう死ぬ気はない？」
「……っ！」
かぁっと顔が熱くなるのを感じた。
知ってたんだ、全部。
だから縄跳びだなんて突拍子もないこと言い出したんだ。

「また明日ね、亮一」
僕は返事をしないまま走り出した。
またね、なんて言わなかった。
明日なんてなければいいのに。

1・気弱な中学生　鈴平亮一の夢　―2

戻ることないと思っていた家に帰ると、明かりがついている部屋は一つもなかった。二人とも寝ている。
僕は二人を起こさないようにしのび足で自分の部屋まで戻った。
できるだけ音をたてないようにドアを閉めながら、深く深く、ため息を吐く。
明日からどうしよう。
でも考えることだけは散々やったんだ。
選べる選択肢なんてもうない。今からの数時間で答えが出てくるような簡単なものじゃない。そして時が過ぎてもよくなることだとも思えない。
おまけに教科書は全部破いた。
……学校、行かなきゃだめかなぁ。
すべての現実から逃げるために布団を被りこんだ。

……。

……。

ピピピッピピピッ
優しさのかけらもない電子音に起こされた。
いつの間に眠っていたんだろう。無情に音量をあげながら叫び続ける時計の頭を叩き、僕は布団からずるずると這い出した。
週ごとに時間設定できるデジタル時計なんて買うんじゃなかった。わざと寝過ごすこともできやしない。
ベッドから出たあとはのろのろと半ば自動的に制服に着替えて、カバンを手にとって部屋を出た。教科書を入れる必要はない。
頭がずきずきと痛い。
リビングには誰もいない。父さんはもう家を出ていて母さんはま

だ寝ている。いつもどおりだ。僕もいつものように食パンと牛乳だけを腹に放り込んで、テーブルの上に置いてあった弁当代わりの五百円玉を掴んで学校に向かった。
どこかでさぼってしまおうか。ダメだきっとすぐにバレる。学校に行かなかったら教師から家に連絡があるだろうし、外をうろついているときに補導でもされたらもっと問題は大きくなる。
だけど今日の曇空のように憂鬱だと思っていた登校はそんなに苦じゃなかった。
昨夜出会った彼女のことを思い出していたから。
エス。
彼女は夢だったのかもしれない。
もしかしたら生きている存在でもないのかもしれない。
だけど彼女は「また明日」と言ってくれた。
明日なんてなければいいと思ったのに明日は来た。
自分を殺そうとしていたことが知られたときは恥ずかしかった。
でも明日は来た。
僕は生きている。
全部エスのせいだ。
彼女が夢じゃなかったら、夢だとしても明日会えるとしたら名前以外のことも教えよう、必ず。そして嫌じゃないのなら、彼女のこともっと聞いてみよう。
まだ誰もいない公園の入り口を見ながら思った。
――公園まではよかった。
ここから先はどうしようか。
公園の中で時間をつぶす。ダメだ、制服姿じゃ不審に思われるだけだ。
家に戻る。起きてきたばかりで機嫌の悪い母さんに叩き出されるだけだ。
じゃあどうする？
……選択肢なんて最初から一つしかない。

鈍い歩みのまま、とうとう校門の前まで来てしまった。せめて途中でトラックが突っ込んでくるなんて選択肢もあったらよかったのに。そうか、その方法があったか。突っ込まれるんじゃなくて僕から突っ込むって。

だけど今更戻るわけにも行かない。

それに今は少しだけやりたいことがある。

エスに会いたい。

だから一番問題が起きない選択肢、僕が我慢することを選ぶことにした。

昇降口でカバンの中から上履きを出す。上履きは盗まれて捨てられるか燃やされるから持ち帰る癖をつけた。

教室へとぽつぽつ歩く僕の背中を教師や他のクラスの生徒までもがせせら笑っている気がする。無視無視無視無視無視無視無視無視。

廊下で一回深呼吸。覚悟を決めて教室の扉を開けた。

僕が教室に入った途端、今まで廊下まで聞こえていたクラスメイト達の会話がぴたりと止んだ。シン、とテスト中のような静けさが訪れる。

こんな反応ははじめてだ。

どうせまた新しいいじめの方法でも考えたんだろ。

――来るなら来いってんだ。

半分くらいやけになりながら僕は自分の椅子に座った。もちろん椅子の上に画鋲が置かれていないかを確かめて。

しばらくもたたないうちに僕の背後に誰かが立った。

黒板消しか？　それともバケツの水か？

どちらかわかれば対処、というか覚悟も違ってくる。僕は横目で窓に映る自分と、背後の人間の姿を確かめてみた。

予想は大きく外れた。

そこに映っていたのは金属バットを大きく振り上げた生徒で――

「……ッッ！！」

思い切り横に跳んだ。椅子に座っていた、隣にも机が並んでいる、

そんなことは頭から消えていた。
ガタタタッガンッ！
「ったぁー……」
背中を机の脚にぶつけてしまった。変なふうに転んだからだ。痛みにせきこみながら僕は相手をにらみつけようとした。そのくらいの反抗なら許されるはずだ、そう思っていた。
そんな場合じゃなかった。
目の前には天板が叩き割られた自分の机があった。天板の下のスチールがバットの形に歪んでいる。
もしも一瞬でも避けるのが遅かったら。
そんなことは考えたくなかった。
これはいじめなんかじゃない。
殺意だ。
僕にバットを振り上げた張本人――数ヶ月前に僕と一緒にゲーセンに行った彼はまだ生きている僕の姿を見て舌打ちした。
もしこれがいじめだったら無様に転がった僕をバカにする笑い声が響くだろう。
なのに今日は元友人と同じように同じようにバットやカッターナイフを構えている生徒だけ。女子生徒は教室の片隅でおびえたように僕をにらんでくる。
まるで猛獣が教室の中に入ってきたかのようだ。
もちろん、猛獣とは僕自身のことで。
「な、なんで、だよっ」
やっとしぼり出した僕の声に答えてくれる親切なヤツはいない。
一部は様子を見て逃げるように、そして一部は僕にトドメをさすために。じりじりとゆっくりと確実に動き出した。
どうして？
なんで？
昨日の少女のような言葉がぐるぐると頭の中を支配する。
疑問に思ってる暇はない。このままじゃ殺されてしまう。

スチール板にめり込んだバットを持ち上げようとする元友人。だけどぎざぎざに裂けた天板のせいでなかなか取り出すことができない。でもいずれは取り出せるはず。僕を殺すために。
このまま逃げないままでいたら、きっと僕はバットで頭を砕かれる。ボールペンで眼球を抉られる。カッターナイフで首筋を裂かれてしまう。
どうして、どうして、どうして！？
理由なんか知らない。だけどきっとそうなる。でも想像したおかげで熱くなった頭が少し冷えてくれた。
とにかく逃げなきゃ。
元友人を手こずらせていたバットが板から抜けた。
二度目の目標も、当然僕。バットはもう一度高く振り上げられ

ヒュッ！

振り下ろされた。
だけど後ろに立たれたときよりも状況は確認できていた。だから今度は机にぶつからずに避けることができた。ついでに近くに転がっていた椅子を蹴飛ばした。攻撃することに集中していたバットの持ち主に向かって。
「ぎゃっ！」
情けない悲鳴をあげて元友人はすねを押さえて転がった。明らかな殺意を向けていた周りの注意が僕からそれた。
今だ！
僕は転がるように走った、教室の出口へ。最短経路にいる何人かの女子を肩で弾き飛ばしながら廊下へ転がり出た。
振り向くことなんてできない、罪悪感なんて持っちゃいけない。
あいつらは僕を殺そうとしたじゃないか！
全力で走った。自分の靴は教室に忘れてきたから転がっていた誰かの運動靴を拾って外に出た。

でもそこまでだった。
殺されかけた恐怖と、どこにぶつければいいのかわからない怒りが全力で走った疲れと混ざって僕の膝をがたがたに揺らした。もうこれ以上走れない。僕は校舎から見えないブロック塀の影に座り込んだ。
苦しい、肺の奥から全部空気が押し出されそうだ。
だらだらと流れた汗が目に入ってしみる。
顔を制服でぬぐいながら校舎の入り口をそっと見てみた。
僕を追いかけてくるような奴はいない。
大丈夫なのかな……。
「なんで、僕が殺されなきゃいけないんだよ……」
僕が殺される？
自分の呟きだったはずなのに一番驚いたのは僕自身だった。
やっぱり僕は殺されようとしてたの？
怖くなって何もかも怖くなって僕は膝を抱えた。全ての世界から視線を逸らした。
殺される。殺される。殺される。
逃げなければ僕は確かに殺されていた。
どうして？　いじめられていたから？
そんな理由で納得できるものじゃない。あんなに加害者がはっきりした状態で死ねば自分達の進路がどうなるか、それくらい嫌でもわかるはずだ。自分はもっと精神的にも肉体的にも疲弊していたぶられて、それから死ぬんだと思っていた。だからエスにまた会うまで我慢しようと思っていた。
だいたいいじめの理由でさえ納得したつもりはないのに。これ以上何を自分の中に理由付けしたら気がすむんだ。
……いや、心当たりなら一つだけある。
自分がそうでないか疑ったことがあるだけだ。しかもそうでないという証明までされている。そうだったらよかったのにと思っていたことがある。

本当にそうなるとは思わなかった。
こんな世界だとは思わなかった。
違う、これはやっぱりただのいじめだ。
クラスの皆が口裏をあわせて自分をそれに見せかけて殺そうとしただけだ。きっとそうだ。あんな恐ろしい世界がこれからもあるだなんて

「キミ、アンチカテゴリになったんだよ」

突然降ってきた声。僕の葛藤なんて最初からわかっているかのような。
反射的に震えた肩を押さえながら僕はおそるおそる顔を上げてみた。
「女の子……？」
エスじゃない。白いシャツと黒い上着を着ている。肩までの長さの髪は薄茶色になるまで色を抜き、ジーンズでできたショートパンツからは細くてすらりと長い足が伸びている。街中よりもテレビや雑誌の中にいそうだ。いろんな意味でエスとは正反対だ。
この子、もしかして僕が校門から出てくるとこ見てたのかな。
「ボクはミコト。よろしくね」
ミコトは地面に腰を落としたままの僕ににっこりと笑って手を差し伸べてきた。きれいに磨かれた桜色の爪が並んでいる。
だけど握り返す気になんてなれない。
殺されかけたばかりに見知らぬ誰かと仲良くできるような無神経さは持ってない。
「握手ダメなんだ？　もしかして潔癖症？　お節介かもしれないけど、治したほうがいいと思うよ」
本当にお節介だよ。
「さて、聞いてたかどうかわかんないからもう一度言うけど。キミ、アンチカテゴリになったんだよ」

「アンチカテゴリ……？」
「そ。アンチカテゴリ。知ってる？」
「……知ってるさ、もちろん」
さっきまで必死に振り捨てようとしていた言葉だ。
アンチカテゴリ。
自分がいじめられているのを自覚したとき最初に疑った。
ある日突然仲間はずれになってしまう病気、だと僕は思っている。なんでそうなるのかはまだ誰にもわかっていない。でもアンチカテゴリになった人は政府の保護を受けることができる。

『アンチカテゴリかも？　そう思ったときはすぐに保健所へ！　あなたの友達はもう友達じゃありませんよ』

ときどきCMや広告で流れる政府の文句だ。
自分をアンチカテゴリだと思った人は保健所に連絡して心理検査を受けなければいけない。アンチカテゴリだったらそのままどこかの保護施設へ。そうでなかったら保健所の裏口から何もなかったかのように帰される。
……僕も検査を受けたからよく知っていること。
「結果はっ……一度検査は受けたよ。でも陽性反応は出なかったって」
「それはいつ？　それにアンチカテゴリが発症するまでの期間って知ってる？　……たった数時間から一日ってとこだよ」
「数時間？」
そんなことどれかに書いてあったかな。自分にアンチカテゴリを疑った日に自分にわかりそうなことは全部調べたつもりなのに。
発症のメカニズムはわかっていない。よって前兆も潜伏期間も不明。わかっている人間は誰もいない、はず。どこかの偉い人が書いていた。
「……君はアンチカテゴリがどんな病気かわかっているの？」

「もちろん。原因もどんな病気かも――本当は病気なんて生易しいものじゃないってこともね」
病気じゃないって？
あんなに急に殺意を向けられる原因が自分自身にあってたまるか。
やっぱりあれはいじめの一環で僕が逃げ出したことを自意識過剰と今ごろ笑っているのかもしれない。そう考えたほうがしっくりくる。
全力で逃げた疲れはミコトと会話しているうちに少し軽くなった。僕は座りこんだままの腰をあげて、歩き出した。ミコトの方を見る必要はない。
「あれ、どこ行くの？」
後ろから声がかけられたので振り返らずに返事した。
「家に帰るんだよ。いじめられてるから引きこもるしかないだろ」
「喰われちゃうよ？」
喰われる？　殺されるの間違いなんじゃ。
……この子は適当なことを言っているだけだ。なんて無責任。
「はいはい、食人族でも呼んでくれば」
僕は片手をひらひらと振ってミコトへの最後の返事にした。

1・気弱な中学生　鈴平亮一の夢　―3

家に帰るには昨日の公園の前を通る必要がある。
少しは期待していた。
でも本当にエスがいるだなんて思わなかった。
今日のエスは黒いドレスを着ていた。昨日よりはワンピースに近いけどそれでも街中で出会うには異様な格好だ。ドレスの色にあわせた小さなバッグを提げ、同じような黒い傘を差してくるくると回している。曇だけど雨は降ってない。エスは学校には行ってないんだろうか、やっぱり。
「あっ」
すぐにエスは立ちすくむ僕に気付いた。
「お帰りなさい、亮一」
微笑んだ。
「たっ、ただいま」
「今までのお友達とはサヨナラしてきた？」
「……え？」
「だって亮一、お友達にいじめられてきたんでしょう？」
「い、いやっイジメはあったけど、あれはイジメじゃなくて、その……」
何といえばいいのだろうか。
それよりどうしてエスは僕のいじめを知っているんだろう。
まさか見ていた？
学校には行ってないって昨日聞いた。それにこんな子がいたらドレスじゃなくて制服を着ていても目立つはずだ。エスは僕の学校には通ってない。
でももしかしたらフェンスでしか囲まれていない校舎裏でバケツの水を被せられたところや、なくしたカバンを探しているところを見たのかもしれない。

エスはどこまで知ってるの？
どんな姿を見てたの？
僕が死にたがってると思ったのも全部見てたから？
クラスメイトや両親達と同じように、エスまでもがみにくく自分を嘲笑っているような気がした。
僕をこの世につなぎとめてくれた彼女がそんなことするわけないのに。
だけどエスは見下すどころか眉間にしわを寄せて僕を少しだけにらみつけた。文句があるわけではなさそうだ。
「なんだか亮一は今までの人と違うわ」
「……？」
今までの人？
詳しく聞こうと思ったそのときだ。
「見つけたっ！　世界の敵！」
「ええっ！？」
何かを言いかけたエスの言葉は初めて聞いた声に遮られた。
やけにかん高い少女の声。エスの向かい側、僕の後ろにその子は立っている。
振り向くとそこには――ツインテールの巫女がいた。
「み、巫女さん？」
このへんに巫女さんがいるような大きい神社はない。それに神社でバイトするには年齢が低すぎる気がする。僕と同じくらいだろうか
そしてツインテール巫女の隣には丈の短い上着を着た少年がいた。こちらも僕と同い年か、少し上といったところか。右目に眼帯、左手に包帯を巻いている。街中で見たら病院の帰りかと思ってしまう。だけど、巫女服の少女との組み合わせじゃ。おまけに目の前にいるエスはいわゆるロリータ服。
……嫌な予感しかしない。
僕のクラスにはいないけど隣のクラスにはいた。普通というカテゴリに納まることをよしとせず、脳内にいる誰かと戦い続けている

何人かの生徒達が。
「邪魔だからどきなさい、そこのアンタ！」
「いた、いたっ！　ちょっといきなり蹴らないでよ！」
足やら腰やら蹴られて僕は横に追いやられてしまった。殺されるよりマシだけどさ。
というかなんだよ、なんなんだよ、この展開はさ！？
ホラー始まったかと思ったらコメディものとか！　ゲームだったらクソだよ、うんこだよ。
「まあまあ、刹那姫は君を助けたつもりなんだ。そんなに怒らないでくれ」
眼帯の少年が肩をすくめた大げさなポーズで笑った。刹那姫というのは巫女服の子のことみたい。
「ふん！　勝手なこと言わないでよ、エンドオブファイヤー！　あたしは攻撃するのに邪魔だったから蹴飛ばしてやっただけよ、別に助けたつもりじゃないんだからねっ！」
「はいはい、わかっていますよ」
僕はわかってないんだけど。
エンドオブファイヤーと呼ばれた少年が刹那姫の言葉にもう一度肩をすくめた。なに、演技？　かっこいいって思ってやってんの？
なんだか肩こってる人にしか見えないよ。
どちらの名前も親の顔を見たくなる、というか漫画のキャラクターみたいだ。本名ではないのかもしれない。そう思いたい。
本当にどうしてこんなことになっているんだろう。あまりにも似合っていて気付かなかったけどエスの格好は街を歩くより、そうだ、コスプレのように見える。
もしかして彼女が待ち合わせしていたのはこの二人で。
今から始まるのは寸劇みたいなもので。
……いけない、そう考えるといろいろ納得できてしまう。
さすがにエスがいじめに加わっているだなんて思わない。でもクラスの誰かが何かを吹き込んだのかもしれない。いじめを知ってい

たのもそういう理由で……ああっ最悪の妄想が止まらない。
昨日のうちに死んでおけばよかった。早くお家帰りたい。
帰ってもろくなことないってわかっているはずなのに思ってしまった。

「さぁて、巻き込まれないようにそこで見てな」
「……言われなくても……」
「あと俺のことはエンドオブファイヤーと呼びな！」
嫌だ。そんなライバルキャラが使う必殺技のような名前なんて。
「さぁ俺は俺の正義を実行する！　俺の右手が暗黒の炎に燃える！」
「……くはっ」
聞いてるだけで恥ずかしくなるセリフと右手を顔面にそえる妙なポーズに思わず変な笑いが漏れた。とっさに手で口を押さえたから聞こえなかったみたい。よかった。
「あたしの聖符よ、邪なる気を祓うためにいざ顕現せよ！」
「ばぶふっ」
予想できたはずの追加攻撃。
今度は手で押さえても空気が指の隙間から抜けて変な音になってしまった。
しかも刹那姫とやらが取り出したのは六枚の紙。符と言うには書いてある文字が汚すぎるし、そもそもどう見てもメモ帳を破いたものだ。ひどい、ひどすぎる。コスプレでもありえない。なんなのこの人達。僕友達なんかじゃないから！　絶対！
もちろん二人ににらまれた。
ぼくしらないよ？　今のは猫か犬ナンダヨ！
そんなふうに視線をそばの茂みに逃がしてみた。意味ないことくらいわかってるさ。
でも幸運なことに僕に構っているどころじゃないようだ、二人は改めてエスをにらみつけた。
エスの方はというと二人の登場に動揺もせず、傘の柄をくるくる

と回した。
「えっとあなた達……誰？」
二人を見つめて首を傾げるエス。
し、知り合いじゃないのかっ。
「お、お前のせいでひどい目にあってるのに！」
「そ、ソイツだってアンチカテゴリにしちゃったんでしょ！」
ソイツ、とツインテ巫女は僕を指差した。
「ああ」
ぱん、とエスは両手を叩いた。
「食べ残しさん達ね。ちょうどよかった、お腹すいてきたの」
「だ、黙れ世界の敵め！　お前を倒して俺達は元の生活に戻るんだ！　不死の使者よ、エンドオブファイヤーの呼びかけに応えて汝の敵を焦がして滅ぼせ！」
「……もふっ」
眼帯の少年が右手を水平に構えると同時に僕の口からもまた変な笑いが漏れてしまった。

でも今度は笑い飛ばすどころじゃなかった。

何もないはずの空間に小さな炎の塊が生まれたから。
見間違い、だと最初は思った。
でも僕が目をこすっている間に塊は体を持ち、足を持ち、羽を持ち、口ばしを持って実体を持った。
炎の鳥だ。あんなもの見たことない。見たことないのにどこかで見たことある。テレビの中や漫画の中、似たデザインのモンスターがいた。まるで劣化コピーをそのまま具現化したようだ。
「俺は命令するっ、全力で焼き尽くせ！」
どこかで聞いたような少年の命令と共に炎の鳥が跳んだ。
ただまっすぐにエスの方へと。
翼で風を切ることも重力に捕われることもなくまるでロケット花

火のように緩い弧を描きながら突き進み飛んでいく。
この世ではありえない光景。
ただ、鳥のデザインと同じように既視感を感じてしまう。どこで見たのかを思い出せないくらいに。
エスは身動き一つすることなく炎の塊を受け止めた。
なーんだ、手品なんだ。
だってこんなことありえないもの。
あはは、僕を驚かすためにこんなことまでする、なんて……
すん、と黒い臭いが鼻腔を刺激した。
何かが焼けて爆ぜる音が耳に届いた。
エスの黒いドレスが赤く燃えあがっていた。天使の環を描くくらいきれいだった髪がぢりぢりと溶けていた。白い肌の向こうに血が滴る肉が見えた。
それにこの独特の臭いには覚えがある。いつだったか、ライターを持ってきた誰かに髪の毛を燃やされたときと同じ臭い。
つまり髪の毛が焼ける臭いなんかより強いこの臭いは。

エスが焼ける臭い。

「……っ！」
ヒュッ、と冷たい息が僕の喉を下りていった。
目を背けて逃げてしまいたい。
だけど指先一本さえ動かすことができない。
「霊術聖符・私は全てを切り裂く！」
本当にどこかで聞いたようなセリフと共に刹那姫が両手を前へと振り回した。
ただのメモ帳がはらりと地面に落ちた。
が、その代わりどこかから現れた六枚の符がこれまた炎の鳥と同じようにエスに向かって跳んだ。
驚かなきゃいけないことなのに。的外れにも僕は『またどこかで

見たような技だなぁ』なんて思ってしまった。エスが燃やされているっていうのに。切り刻まれようとしているのに。
オリジナリティなんてどこにもない、自己がない。エスが殺されているっていうのに、こんなの現実でありえるわけがないのにあはは僕はどうしてこんなことを考えてるんだろう、壊れちゃったかなぁ。
僕が間抜けな口をぽかんと開けている間に六枚の符が焼けて爛れたエスの皮を切り裂き肉にまで埋まった。あれが紙だろうが鉄でできていようが明らかに致命傷だ。
「ざまぁみろ！　やった！」
「やった、やったぁ！！」
一人の少女を惨殺したというのに二人組は手を取り合って喜んだ。
ひどい、なんでこんなことできるんだ。
世界の敵だかラスボスだか知らないけど、エスは僕を助けてくれたんだ。エスは何もしてないじゃないか、エスを殺すなんて……

違う。

惨殺というのならエスは死んでなきゃいけない。
あれほどの火と斬撃を受け止めたというのに、エスの脚は地に立っている。燃えて崩れ落ちるかと思っていた腕はいつの間にか傘の柄を回していた。
や、やっぱり手品だったんだ。
なんてそんなこと言えるわけがない。
だってあの臭いは確かに人が焦げる臭いだ。用意できるものじゃない。
じゃあなんで生きてるの？　どうして？
幻覚？　夢？　これは僕の妄想？
「あなた達、本当につまらないわ。だから食べ残されたの、まだ気付かないの？」

はぁ、とエスは心底つまらなさそうにため息を吐いた。
「それが本当に今のあなた達のやりたいこと？」
「じゃ、じゃあお前は何がやりたいんだよ！　お、お前のやってることだってどこかの誰かと同じかもしれないじゃないか！」
眼帯の少年がムキになって抗議する。
「そういうことじゃないのよ、お馬鹿さん達。エスがあげたイドがあるならやりたいことがたった一つだけあるはずなのよ」
「そっそれは……」
眼帯の少年が明らかにうろたえた。
巫女服の少女が後ろめたそうに地面を見つめている。
イド？　ってなんのことだろう。井戸？
「わかりたくないのなら見せてあげる。これが『エス』のやりたいこと」

す、と人差し指を巫女服の少女に向けるエス。
さっきの二人のような何かの必殺技というわけじゃない。
ただ、選んだだけ。
それがわかった巫女服の少女の顔がひくりと強張った。
「それでは――いただきます」
エスは上品に微笑んだ。
その瞬間
「ひ、やあああああああ！！」
悲痛な少女の叫びが響いた。
巫女服の少女の左手が消えていた。
自称刹那姫の肩から薄い布じゃ押さえきれないほどの血流がどくどくと流れ出ていた。血で絞られた袖には、見間違いなんかじゃない、物の存在というものを感じない。
その存在はどこに行ったというのか。
エスは悲鳴をあげる少女を見ながら薄っすらと笑った。

恍惚感。
まるで美味しいケーキを食べている子供の表情。
「い、いたい、いたい、やめで、やめでぇえええ！！　なんでもするから食べっ、食べないでええ、いだい、助けてよおっっ！！」
「やめないわよ。それより抵抗するのをおやめなさいな。苦しいだけよ」
またも少女の悲鳴が響いた。
次に消えたのは胴体。服の上からでも本来あるべきものがぼこぼこと削れているのがわかる。
「や、やだあああ、あ、あたしちゃんとやりたいことあるものっ、しっしにたくないいいいいいい！！」
「嘘。やりたいことなんてないくせに。それに、死なないわ」
「しぬっ、しぬ！！　やめて、いたい、たす、だすげて、や、だぁぁあああ……ぐぐ、あうううう……いたいよぅ」
白かった着物が赤い袴よりも紅い色に染まっていく。
エスは……エスはいったい何をしてるんだ？
少女を喰っている。
そうだ、それ以外にどう言えばいいんだ。
昨晩自分の自殺を止めるきっかけになった少女が別の少女を喰っている。
こんなの、夢だったらいいのに。
本当の自分はまだベッドの中で明日が来ることに怯えていればいいのに。
昨晩誰にも会わないで首を吊って走馬灯に似た幻覚を見ているのでもいい。
――そうでないのなら、今僕が胸に抱いている感情が正しいわけがない。
巫女服の少女の脚がついになくなり言葉どおりに血の池の中に崩

れ落ちた。喰われる痛みに堪えざるを得なかった少女が放心の末にうつろな視線を僕に投げた。
「ごちそうさまでした」
満足そうにエスが呟き、巫女服を着ていた女の子が一人消えた。
初めからそこにいなかったかのように血溜りさえ消して、巫女服だけ残して
血の一滴も残さずに人間が一人消えた。
「あぁっ、ち、違うんだ、へ、変なことができるようになったから、やってみたかっただけなんだ、食べたのはあいつ一人なんだ、だ、だから許してくれっ、殺さないでっ」
逃げることも忘れた眼帯の少年がコゼットに跪いて命乞いを始めた。

――お姫様の機嫌を損ねた家来は死刑になってしまいました。

そんな言葉がまた頭をよぎった。
童話なんかで終わらない。もう僕は知っている。
エスはきょと、と少年を見つめ返し
「……一人だけ逃げるつもりなの、京介。あんたも本当の友達になろうよ」
とエスじゃない口調で少年に笑いかけた。
「な、なんで俺の本名を……」
「気付かないの？　あたしよ、梓よ。それとも刹那姫って言ったほうがいい？」
そうだ。彼女の口調はエスというよりも、――さっき食われてしまった巫女服の少女じゃないか。
「京介ってば嘘ついちゃダメよ。あんただって食べたでしょ、一緒に、何人も」
「う……」
口ごもる眼帯の少年。

食べた？
もしかして巫女服の少女も、この少年も、エスみたいに？
「ねぇ、ここは思ったよりも気持ちのいいところだよ。あんなに抗ってたのがバカみたい。ミコトって子もバカよ。エスはこんなにも優しいのに気付かなくて。京介も抗うことなんてやめてこっちにきなよ」
「あ、梓。生きてるんだね？　死なないんだね？　痛く、ないんだね？」
「抵抗しなければね」
こくこくと少年はうなずき、
消えた。
さっきの少女と同じように服と包帯と眼帯だけ残して。風が吹いて、包帯と眼帯がどこかに運ばれていった。
服だけが重くてその場に残っているけどきっと人が消えて残されたものだなんて誰も思わないはず。血は一滴もついていないんだから。
「一人だけ助かろうとしたでしょ、京介。でも大丈夫、最初にひどい目にあったのも、逃げようとしたのもエスになったんだから全部許してあげる。あはははは……」
あはは、とエスらしくない表情で笑っていた顔が、す、ともとの人形のような顔に戻った。エスの顔だ。なのに僕には見たこともない冷たい顔に見える。
さっきの二人は……死んだのかな。
それともエスの中で生きてるのかな。
僕も、食べられてしまうのかな。
何事もなかったかのように傘をくるくると回すエス。きっとエスにとっては本当に何事でもなかったんだろう。
エスはゆっくりと僕の方に首を傾けた。
「亮一」
名前を呼ばれた。

声も音も同じはずなのに、目の前にいる少女が昨日出会ったどこか不思議な少女と同じだなんて、そんな当たり前のことさえ考えられなくなった。

これは現実？
それとも夢？
じゃなかったら僕の希望？

捉えることができない現実にくらくらと目まいがした。
死ぬにしろ目覚めるにしろ早く終わればいいのに。

「あー、やっぱりダメだったね。確かに強いものを考えることができれば強いとは言ったけどさ、本当に強いと心底思ってないと無理なんだよね」

空気をあえて読まない、のんきな聞き覚えのある声が遠い世界に行きかけていた僕を呼び戻した。聞き覚えといってもついさっきだけど。
誰だったか、僕は少し前に名乗られた名前を叫んだ。
「ミコト！？」
「や、またあったね。喰われないようにって言ったのにもう悪い雌にひっかかって」
僕の後ろにいつの間にか片手を上げたミコトが立っていた。
「ま、予想していたから来たんだけどね」
ミコトはあげた片手で頭をかきながら言った。
「こういうのに一番強いのは、さ――やっぱこういうもんなんだよ」
肩にひっかけている小さなスポーツバッグにミコトは片手を突っ込んだ。
出てきたのは大きなサバイバルナイフ。でこぼこの凶悪な刃を小さな舌でぺろっと舐めあげながらミコトはいたずらに笑った。

「そ、そんなナイフでどうしようって言うんだよっ」
僕は思わず言ってしまった。
確かにナイフなんか目の前に出されたら僕あたりはびびって悪いこともしていないのに謝ってしまうかもしれない。
だけどさっき炎の鳥を見た。重力に逆らいながら跳ぶ符を見た。
そして二人の人間が消えるところも見た。
「これもさっきの二人のような妄想の産物だと思うかい？　のんのん、これは立派な刃物、購入の際に身分証明を求められるほどの代物さ♪」
ミコトは慣れた手つきで大きなナイフを振り回した。だけど僕が言いたかったことはそういうことじゃない。
だって今更ナイフなんかでどうこうできることだとは思えない。
さっきと同じように喰われながら無様な姿を晒すか、一秒たりとも猶予を残すことなく存在ごとかき消えるか。
そしてミコトの次は自分だ。
僕の焦りなんて気にもせずにミコトはスポーツバッグを投げ捨て、ナイフを小脇に構えた。
「いっくよー」
挨拶でもするかのように軽く笑い、ミコトは身を低くしながら走った。
無言でミコトをにらみつけるエス。人形のような顔の眉間にしわが寄る。失望とは違う、僕が初めて見る不満、怒り、見下し。
走っていたミコトの体が大きく傾いて後ろに大きくのけぞった。
ぽた、ぽた、ぼたたっ。
赤い染みが地面に落ちた。
「……やったね？」
仰け反っていたミコトの頭が振り子のように元の位置に戻った。
右顔面の上部が存在していない。
白い骨と淡いピンクの脳髄がそこに見えた。
頭から垂れ続ける血をなめてミコトはもう一度走り出した。

さっきと同じようにエスは避ける素振りさえ見せない。

トスッ。

軽い音を立ててナイフがエスの胸に突き立った。

「……けほっ」

小さい咳の後にエスの口はしから血が垂れた。

「……本当に馬鹿な子」

笑った。血を化粧とした唇でエスは笑った。

ついで明らかにミコトの顔が不機嫌になる。

「……糞人形め」

ミコトの舌打ちと同時に風が吹いた。舞う砂埃に僕は目をこすった。目を開けるとそこにはもうエスの姿はなかった。

どこに行ったんだろう。

まさか……死んだ？

それはミコトの口をへの字にした不機嫌な顔を見れば違うことがわかる。こっちもいつの間にか傷一つないきれいな顔に戻っていた。

「さってと。まだ名前聞いてなかったよね」

何もかもが嘘だったかのようにミコトは僕の方に振り向き、笑った。血なんて一滴もついていないナイフをバッグに入れながら。

「まだ聞いてなかったよね。キミの名前は？」

「ぼ、僕は亮一。鈴平亮一」

「そう、亮一。自分の名前があることはいいことだ。少なくとも名前だけは人間でいられる」

「……？」

「さてと、亮一。キミはこれからどうするんだい？　家に帰る？そして家族に殺されるのもいいかもね。大丈夫、アンチカテゴリを殺して罪悪感を持つ人間なんていない。たとえ実の子供であってもだ」

「それは……」

罪悪感は持たないだろう。でもそれは僕がアンチカテゴリでなくても同じことだ。

僕の沈黙をどんなふうに思ったのかわからない。でもミコトはいきなりこんなことを言い出した。

「んー、じゃあ少しお腹も減ったし、軽く食べにいこっか？」

「……え？」

1・気弱な中学生　鈴平亮一の夢　―4

「まいどありがとうございましたー！」
サービスゼロ円のスマイルを向けられながら、バーガーが盛られたトレイを渡された。僕はそれを両手で持ちながら二階に作られた飲食席への階段をあがった。一番奥の席ではミコトが「やっほ」と手を振りながら僕を待っていた。
無言でミコトの目の前にトレイを置くと
「まさかアンチカテゴリになったのに笑顔を向けられるとは思わなかったでしょ？」
と僕の心の中を見たかのような言葉をかけてきた。
「……うん。もしかして、さ」
「おっと、いらない希望は持たない方がいいよ。キミがアンチカテゴリになったのはもうどうしようもない事実。とりあえず、キミ、それだけで足りるの？」
僕のぶんはシェイクが一本。昼前の食事と考えると足りない気もするけど幻や夢だとしてもあんなものを見たあとで食べる気なんて起きるわけがない。
対するミコトのぶんはチーズバーガー五つ。それとオレンジジュース。チーズバーガーなんて選択も正気を疑ってしまうけど、量も量だ。いくら育ち盛りでも細い体に詰め込む量じゃない。
本当に全部食べるんだろうか、と思っている間にミコトはバーガーの一つの包み紙をぺりぺりとはがして大きくかぶりついた。歯形が残されたチーズバーガーにミコトの欠けた頭を思い出してしまい、僕は視線をそらした。
「そうそう、こんなとこでアンチカテゴリが悠長にご飯食べれる理由だけど。そだね、キミはこういうとこ来るのは初めてじゃないだろ？」
「そんなの当たり前だろ」

今どきハンバーガーも食べたことがない中学生なんてどのカテゴリにいるんだろうか。もしかしたらエスは食べたことないかもしれない。注文の方法だってきっと知らない、と思う。
「じゃあ、隣に座った人の顔はいつまで覚えてる？」
「えっと……」
隣の席を見た。誰もいない。もう少し時間がたてば誰か座るかもしれない。でもそれがサラリーマンであれ学生であれありうる気がする。
つまり。
「最初からそんなに見ないかな。特徴的だったら覚えるかも」
「そうだね。ボクみたいにかわいくないと覚えないよね」
「……」
突っ込むべきか。
実際かわいらしいけど。
でも自分で言うことじゃないよね。
「だからいいんだよ。ここにはあらゆるカテゴリの人間が出入りする。お互いに興味を持つことなんてほとんどありえない。だから内面にどんなものを抱えていようとも、たとえそれが人間でなくとも、誰も知ることはない」
そうだとは思う。
だけど改めてお前なんかに誰も興味は持ってないんだ、と言われているようで僕はうなずくことができなかった。
「だけど内面がわからないのはボクとキミも一緒。ボクがキミの心を読むことができないようにキミもボクのことを理解することは永遠にない。もっとも、アンチカテゴリだけはそうだともいえないんだけど」
「どういうこと？」
「エス。キミは『エス』に人間としての自我を奪われた。代わりに与えられたのがアンチカテゴリの自我」
「エスって……あのドレスの子？」

「違うよ。アイツはそう名乗ってるだけ。より深く『エス』に触れたから名前さえ忘れてしまったんだろうね」
「名前さえ……」
名前だけは人間でいられる、とはそういうことだったのかな。
「じゃあ『エス』って何？」
「人間の本能かな。一説では精神世界につながってるとか、どこかの誰かの意識につながってるとか、宗教の話だけどね。あ、別に勧誘してるわけじゃないよ。ボク、そーゆー存在嫌いだもん。
話戻すけどー、アンチカテゴリてのはね、こんななっちゃう代わりに妄想を具現化する力を手に入れたつもりになっちゃうんだ」
「つもり？」
変な言い方するなぁ。
「だって結局妄想なんだもん。あれってアンチカテゴリ患者以外には見えないんだよね」
「幻覚ってこと？」
それはおかしい。
「だって二人消えたんだよ。僕の見てないうちにこっそりどこかに行ったの？　本当は死んでないの？」
そうとは思えない。
だって服や眼帯はその場に残った。
最初は手品だと思ったけどわざわざ僕一人を脅かすためだけにあんな大掛かりな仕掛けをするわけがない。
「んー、そだね。ちょっと手貸して」
「えっと、こう？」
僕は言われるがままに右手を出した。
ぎゅむ。
思い切りつねられてしまった。
「ちょ、痛い！　いきなり何すんのさ」
「痛かったでしょ？　だから怒ったんでしょ？」
「怒るに決まってるじゃないか」

「肉体の感覚は心に強く影響を与える。逆に心が肉体に影響を与えることもある。落ち込んで食欲なくなるときとか、あるでしょ？」
そう言いながらミコトは二つ目のチーズバーガーの包みを開けた。
落ち込んで食欲がなくなるだなんてことはミコトには無縁そうだ。
きっとストレスで食欲がないのに無理矢理口に入れたものを吐き出すなんてことも。
「肉体と心を切り離して考えることはできない。そして人間同士はお互いの心を知ることはできない。……人間同士はね」
「つまり、アンチカテゴリなら？」
「そ。といっても表面だけ。みんな同じ夢の世界にいるようなもんだよ。そして夢の世界で死んだと思えば、肉体にも影響される」
「……死ぬってこと？」
「うん」
「体が消えたのも、心がそう思ったから？」
「んー、そうだと思うけど、もしかしたら違うかも。でも都合がいいよね、消えるとさ。色々と」
それはいったい誰にとって？
考えると寒気がした。
「消えた子達ってさ、もしかしてエスの中にいるの？」
「そうだね、そうとも言える。例えばこのチーズバーガー」
食べかけのチーズバーガーをミコトは指差す。
「このチーズバーガーは胃の中で栄養として吸収される。つまりチーズバーガーは僕になったとも言える。食べる、食べられたってのは存在を喰い合うことでもあるんだ」
「存在を喰う……」
ミコトは食べかけのチーズバーガーに被りついた。
しばらく僕たちの間に訪れたのは無言。
僕が何も言わないからかミコトはひたすらにチーズバーガーを口の中に放り込んでいた。きっとミコトは僕が何も言わなければ何も語らない。そしてそのまま去ってしまう。そんな気がした。

「その、アンチカテゴリが病気じゃないって」
「うん、病気じゃないよ。あ、でも感染するからやっぱり病気なのかな」
「かっ、感染……！？」
思わず周りを見てしまった。
も、もしかして店員さんや僕の後ろに並んでいた誰かが発症して追われたり殺されたりするんじゃ。
「あはは、大丈夫だよ。空気や接触じゃ感染しない。それよりできるだけ誰かの記憶に残らないようにしてね。キミも元人間なら犠牲者を出すのは望まないだろ」
つまり自分が誰かに覚えられたらその人はアンチカテゴリになるんだろうか。
なんとなく、それは少し違う気がする。理由はわからない。
でも詳しく聞くよりもミコトの一つの言葉に反抗したくなった。
「……その、元人間ってのやめてくれる？　僕はちゃんとした人間」
「どうしてそんなこと思える？」
僕の主張を否定するかのようにミコトは言葉を重ねた。
「今のキミが人間だと言えるのかい？」
「いくらなんでも失礼だよ。僕は人間だ。生まれたときからずっと」
「どうしてそう思う？　どうしてそれが正しいと思う？」
「僕は、人間、だから……」
ミコトが同じ質問を繰り返すのに、僕も同じような言葉を返すことしかできない。
どうしてなんて言われても答えられるわけがない。
考えたことなんてないんだから。
「キミは人間に育てられて自分を人間だと思い込んでいる猿を見たことないかい。あれは人間か？　猿じゃなかったら鳥でも犬でもいいよ」
「……人間じゃないね」
「逆に狼に育てられ、自分を狼だと思い込んでいる少女もいたね。

これはヤラセだって話だけど。仮に何も知らない赤ん坊を動物と同じように育てたとする。これは動物か？」
「いや……人間だと思うよ」
「その理由は？」
「人間にしか見えないから」
「そう、それ」
カップのフタに刺さっているストローをぴっと抜き、ミコトは指示棒のように僕に突き出した。
「人は誰かが『人』として認識することで初めて人になれる」
ストローをカップに戻し、ミコトは改めて僕の顔を見た。
「もう一度聞く。キミは人間かい？」
「僕は……」
もちろんそうだ、なんて答えられなかった。
知っている人間から向けられる殺意。恐れを含む視線。
明らかに人間以外を睨みつける目。
「……そうじゃないから、僕は殺されなくちゃいけなかったの？」
「そうだよ」
あっさりと肯定された。
「人の顔した人でなしがいたら気持ち悪いだろ。誰にも気を留めない街中ならともかく、知った顔の人間が人でなかったら、ましてそれが誰かを同類にしたあげく共食いするような存在なら、殺されて然るべきだと思うね」
「どうして人じゃないってわかるんだよ」
「キミさぁ、聞いてばっかりじゃなく自分で考えたらどうなの」
うぐっ。知らないんだ。しかもごまかした。だけど突っ込むと嫌な反論をくらいそうだ。変な藪はつつかないでおこう。でもどんな話したらいいんだ。
「えっと、さ……やっぱり、あの二人って死んじゃったんだ？　や、生きてるかもしれないけど、その、存在を喰われたんだよね。だから、いなくなったって……なんでエスはあんなことをするの？」

結局聞くことしかできなかった。「また質問？」なんて言われるかと思った。
「そうだよ、喰われたんだよ。あと『エス』じゃないから。名前はなんだかわからないけど、ボクは糞人形って呼んでる」
一応答えてくれた
「アンチカテゴリはね、アンチカテゴリになったときに一つの衝動に襲われる。
同じアンチカテゴリを殺す、食べるって衝動を。
アイツは何の躊躇もなく食べている。きっと、生まれたときから化物の素質があったんだろうさ」
吐き捨てるようにミコトは言った。
「そんなこと言うもんじゃないよ……」
だって僕にはエスがミコトのいうような化け物には見えない。
一人が喰われ一人が消えたところは僕だって見ている。
だけど彼女は僕と同じ何かを抱えている気がする。アンチカテゴリということじゃなく、もっと、胸に潜めてる何かを。それを『エス』だと言ってしまえばお終いだけどそうじゃない、わからないけど。
それに彼女には助けられた。
もしかしたらそれはアンチカテゴリを増やすためだったかもしれない。僕を食べるつもりだったのかもしれない。
なぜかそれでもいいと思えた。
敵視している相手をかばう言葉が出たせいか、ミコトはむっと口をとがらせて不満そうな顔になった。眉が気持ちつりあがってるけどあまり怖くない。むしろかわいいっていうか……いやいや僕にはエスがいるし。いや、いないってば！
「騙されてんだよ、キミ。あの見た目だけはかわいー顔にさ。てゆーか、なんでアイツがエスって名乗ってるの知ってんの？　いつの間に知り合いになったの？　もしかしてナンパ？　奥手そうな顔してよくやるねー。最近の中学生ってこわー」

「ち、違うよっ、先に声かけてきたのあっちなんだから」
「声かけてきたにしてもさ、あんな格好じゃん。ふつーだったら関わろうだなんて思わないよね。それともゴスロリ趣味？」
「趣味とかじゃなくてっ」
「じゃあなんなの？　やっぱりかわいかったらなんだっていーわけ？　ひどい、やっぱり男ってみんなケダモノなんだ……ボクのことも弄ぶつもりなんだね……うん、別にいいけど、ボク高いよ？」
「高いってなんだよ、普段君何してるんだよ！？　じゃなくってっ、何この流れっ！」
　二股かけたあげくにお金で解決しようとしてるとんでもない中学生みたいじゃないか。うう、昼前で人がいなくて本当によかった。
「静かにしなよ、誰かに覚えられてアンチカテゴリを増やしたいわけ？」
「うぅっ」
　ひどい。
　大声を出す流れになったのはミコトのせいだ。
　誰かが僕を覚えてアンチカテゴリになったとしても無実を主張する。
「それよりキミはこれからどうするの？　最初にボクに言ったとおり家に帰って殺される？」
「人間に戻れる方法は、ないよね」
「たぶんね。もしかしたら国の保護施設とやらじゃ見つかってるかもよ」
「君は保護施設にいかないの？　君もアンチカテゴリなんだろ」
　本当はそうとは思えてない。
　ミコトは少し性格に難があるだけでどんなカテゴリでも歓迎されるタイプに見える。
　どんな人間もアンチカテゴリになる可能性があるなんて言われてるけど、僕にとって一番身近な例は僕だ。排除される人間も僕と似たようなタイプじゃないかと錯覚してしまう。

エスだって、消えた二人だって結局は世界になじめそうにないから。
「んー、ボクはやることあるからそれやってからだね」
「やることって、あの子を、その」
「うん。殺すのさ。それにできるだけたくさんのアンチカテゴリを殺しておかないと。あいつら人間より弱いくせに仲間を増やすことだけは得意だかんね」
殺すことが当然かのようにミコトは言った。
誰かを食べるんだから、殺されて当然、なんだろうか。
「エスはさ、わざわざあんなふうに苦しめる夢を見たの？」
あんなふうに、生きながら体を削られる痛みを与える夢を見たというのか。もしそうだったらミコトに殺されて当然だと思うし、そんな彼女に助けられた自分は昨日やり残したことを実行するべきだ。
「ちょっと違うね。糞人形が見たのはあくまで誰かを食べる夢。そして相手が見たのが食べられない夢。相手は負けたんだ、糞人形が見る夢にさ。死にたくないと抵抗したから生きていた」
「じゃあ抵抗しなかったら、痛くないんだ」
「そ」
抵抗しなかったら、きっと一瞬のうちに消えてしまうんだろう。あの怯えた眼帯の少年のように。
「だからキミも誰かに食べられそうになったら抵抗なんてしない方がいいよ」
「えええ……」
無茶な。
どういう状況になるのかわかんないけど、食べられそうになって抵抗しないなんてできるんだろうか。
「それとも、僕も食べたりするのかなぁ……」
それは疑問じゃなくて呟きだった。だけど聞き逃さないとばかりにミコトの眉がぴくりと動いた。
「もしキミが誰かを食べたら、その時は――ボクがキミを殺す」

「た、食べないよ！　だって人間を食べるなんてっ」
人間だから。
さっき散々人でないと諭されたばかりだからそんな言葉を言うのはおかしい気がした。だから言葉の途中で口を閉じた。
人じゃないからって誰かを食べるなんて、そんなことやりたくない。
それこそ、食べるものが人しかないなんて惨状に陥らないかぎり。
でも殺すってあのナイフで、かな。
ミコトが普段どうすごしているのか少しだけ真面目に気になった。
でも、とりあえずの選択肢は一つしかない。
「……僕、保健所に行くよ」
「うん、それが一番だよ。人間は誰かに守ってもらうのが一番だ」
ミコトは笑った。いつのまにかトレイのチーズバーガーは全部なくなっていた。
僕は来たときと違い、一人で店の外に出た。
誰も僕を記憶することはない。

1・気弱な中学生　鈴平亮一の夢　―5

ミコトにはああ言ったけどやっぱり保健所に行くのは気が進まなかった。

アンチカテゴリの保護施設はどこにあるのかわからない、誰が患者なのかも公表されない。プライバシーの保護のためという文句がついているけど。

もし誰かを喰うことが明らかになっていたら。

そして治療法なんて本当に存在しないのなら。

本当にアンチカテゴリは『保護』されるんだろうか。

アンチカテゴリについて調べることは世間的にはタブーとなっている。患者やその周囲のことを本にしている大学教授がいたけどネットやマスコミで散々叩かれている。病気のせいで身近な人を殺してしまった人間の心の傷を抉るなんてと。

じゃあ患者は？　患者は本当はどこにいるんだ？

あんなに毎日何かの事件を起こしてる政治家が正義の味方だなんて僕には思えない。

患者のことは誰にもわからない。治療法はない。保護施設の場所はわからない。

――たぶん、どこにもない保護施設に送られてしまうんだろうな。人でないのだからって簡単に。

証拠なんてどこにもないはずなのにそう考える方がしっくりきた。

「……死にたくないなぁ」

呟いてしまった。昨日はあんなに死にたがっていたのに。

でもそれはきっと別の道を見つけたからだ。

アンチカテゴリになったというのに生きている二人がいた。だから自分も生きてみたいと思った。

……わがままなんだろうか。
あてもなく彷徨うと人は見知った道に来てしまうらしい。
いつの間にか公園の前まで戻っていた。
「あ」
時間が戻ってしまったのかと思った。
公園の入り口には黒いドレスの少女が、エスが立っていた。
「エス……」
エスは僕が呼ぶと小さく微笑んだ。
どうすればいいのかわからず、僕はその場に凍りついた。動けない。
「幸運ね。もう一度会えたらって思ってたの」
「な、なんのために？」
「お友達になるために。言ったでしょう、あなたが」
コツ、コツ、コツ……
ゆっくりと僕の方に歩いてくるエス。
エスは僕の存在を食べるつもりなんだろうか。
に、逃げなきゃ。
ミコトは抵抗するなって言った。でもきっと今の僕なら無意識にでも抵抗しそうな気がする。今は死にたくない、それよりもあんな無様な姿になるのは嫌だ。
でもどうやって逃げたら？
夢の中ならどこまで逃げても同じ気がするし……いや、逃げたら大丈夫だ。だってどんな方法使ったのかわからないけどエスはミコトから逃げた。だから、逃げよう。
僕はエスに背中を向けて走り出した。
「あ、待って。待ってください！」
後ろから慌てた声が聞こえた。コツコツと足音さえも速くなる。
「待てないよ！」
律儀に返事する僕。
「話を……きゃっ！」

びったん。
間抜けな音が後ろから響いてきた。足音も止まった。
何があったの？
振り向いてみた。
アスファルトの地面に伏している黒い物体があった。……転んだエスだ。
今なら確実に逃げられる。
転んだ女の子を置き去りにして。転んだ責任の半分くらいをなかったことにして。
……。
だってエスだよ？　さっき二人ほど消したんだよ？　一人はあんな残酷な方法で。
僕の足元に何かが転がってぶつかった。
「缶ジュース？」
拾い上げると冷たかった。それに重い、未開封だ。
まさかエスが買ったもの？
「お願い……待って……」
顔だけをあげてエスは再び僕の名前を呼んだ。
派手に転んだようだけど顔に傷はないみたい。よかった。でも白い顔は土ぼこりに汚れている。立てないでいるのは足を打ったからかもしれない。
……うぁー。
ここで見捨てたら男子としてどうなんだ。
いやいやいや、男子とかそういう問題じゃないよ！？
ミコトの言うことを認めるわけじゃないけど人間と考えるには怪しい存在だ。
そ、そうだよ、ここで逃げたら次に出会ったときに問答無用に食べられてしまいそうじゃないか。何より恨まれそう。もしかしたらあの二人よりひどい喰われ方をするかもしれない。抵抗しなかったらいいって言ってたけど、じわじわと燃やされたり刺されたりする

かもしれないじゃないか。

……。

……。

……っ！

どうすれば、本当にどうしたらいいんだ。

頭の中に選択肢のようなものが浮かんだ。あー、僕ってばこんなときまでゲーム脳で嫌になる。

1）逃げる――その場しのぎ。エスを見捨てることになる。後で殺されるかもしれない。

2）助ける――殺されるかもしれない。

……そうか、殺されるかもしれないだけなんだ。

ミコトの話を全部信用したわけじゃない。だけどあの話が本当だったら殺されるのはエスに限った話じゃない。知らない誰かかもしれないし、ミコトかもしれないし……僕自身が誰かを殺すのかもしれない。

……なんて葛藤を数秒のうちに終わらせた。

結局僕は足元の缶ジュースを拾い上げて、エスに右手を差し出した。

「大丈夫？」

「ええ、亮一」

責めることなく彼女は笑った。そして僕の右手を取り、そのまま立ち上がってから両手で包み込んだ。

「待ってくれてありがとう」

「いや、僕は……」

どうするか迷っていただけだ。

拾ったばかりの缶ジュースの冷たさが左手にしみた。

そうだ、返してあげないと。
「これ君のだろ？」
手渡そうとするけどエスは受け取らない。
「ええ。でも亮一にあげる」
「え？　どうして？」
「亮一が昨夜私にくれたから、お礼」
「お礼なんていいよ」
あれはついでみたいに渡したものだ。あまり記憶のフタを開きたくない。
でも断ったら機嫌を損ねてしまうかもしれない。僕はもてあまし気味にジュースの缶を両手で抱えた。
エスが僕をじっと見つめてくる。
……き、気まずいっ。
まるで昨晩の立場が逆転したみたいだ。昨日はどうしたっけ？
……ああ、逃げたんだった、僕が。エスがどこかに行く気配なんてないし……
「……君もジュース飲まない？」
僕の口からまた思わぬ言葉が出ていた。

◆

このケダモノナンパ中学生め、死ねっ！
なんてミコトに言われても今の僕ならおかしくない。ミコトにこんな姿見られたら十中八九殺されるだろう、僕が。
僕達はベンチに並んで座った。
エスは僕が買った缶ジュースを、僕はエスが買った缶ジュースを持って。
もともと持ってた千円と今朝もらった五百円が僕の全財産。マイナス百二十円。増えることはない。
大事に取っておくより使い切った後のことを考えた方がきっとい

い。
　缶のプルタブをこじ開けながらエスの方を見た。エスも同じようにプルタブを開けた。昨日は開け方を知らないなんて勘違いしちゃったな。
　それよりもあまりおいしそうに飲んでるようには見えない。
　無難そうなオレンジジュースを選んだつもりだったんだけど……。
「ゴメン、それ嫌いだった？」
「あまり飲んだことがないだけ。ごめんなさい」
「ううん、いいよ。好みを聞かずに押し付けた僕が悪いんだからさ」
　もしかして、昨日のコーヒーもそうだったんじゃないのか。
　だから開けなかったんだ。
　……ダメだますます恥ずかしくなった。
「コーヒーもさ、嫌いだったりする？」
「嫌いというわけではないわ。飲めないわけじゃないもの。でもね、私達はこんな食べ物じゃダメ。満たされないのよ」
　胸を小さな痛みがついた。
　ついさっきの、忘れようとしていた何かを思い出した。
「あれは、本当に君が、その、……食べて？」
「ええ。おいしくいただいたわ」
　ケーキでも食べた後かのようにエスは満足げに呟いた。
「亮一は、まだお腹がすかないの？」
「僕はさっき食べたから！」
　シェイク一本だけだけど。
「食べ方は、あの子に教えてもらわなかったの？」
「あの子って……もしかしてミコト？　うん、まぁ……」
　糞人形、と忌々しげに呟いていた顔を思い出してしまった。さっきも思ったけどこんなとこ見られたら殺されるんだろうなぁ、あの立派なナイフで滅多刺しに。う、怖い。やっぱりミコトについていかなくてよかった。
「そう……相変わらずバカな子」

本当に心の底から哀れに思っている声だった。
「私達は同じ夢を見続けているの」
「うん、それは教えてもらった。いや、その、僕、誰かを食べるつもりないから教えてくれなくったっていいよ」
エスの眉間にきゅっとシワが寄る。明らかな不満顔。
「ダメよ、絶対我慢できなくなるんだから。本当に必要だったら『エス』に教えてもらえるけど、でもその前に誰かに食べられちゃうかもしれないでしょう。そうなるくらいなら私が……」
エスの冷たい指が僕の頬に触れ、ガラス玉のように澄んだ目が僕の視界いっぱいに広がる。
「うあ、ちょ、ちょっと待って！　それもやめてよ！」
「食べないわ。だって亮一、お友達になりたいんでしょう？」
食べないと言ったのにエスの顔は遠のくどころか近づいてきて、僕の頬が冷たい両手で覆われて甘い蜜のような香りが僕の鼻に届いて
「あああうううあああ、たた食べないでっ」
「食べないわよ？」
「じゃ、じゃあ、なんで顔近づけるの」
「私の中の『エス』が教えてくれるの。亮一がこうされたいって。ね、当たってるでしょう？」
「ち、ちっ、違う」
「嘘」
違わない。
違うと言い切れない。
自覚していなかった無意識を暴かれてしまった。
頭の中が真っ白になる。
柔らかくて暖かい何かがぽかんと間抜けに開いたままの僕の口に重なった。
僕はどうしたいの？
エスとキスしたかったの？
それとももっと先に？

このままエスの体を抱きしめるのも押し倒すのも食べてしまうのもそれとも食べられてしまうのも一瞬だけどそれもいいかなって思って

「……ご、ごめんっ！」

僕は両手でエスの体を押し返した。

エスはすんなりと重なりかけていた僕の体の上から退いてくれた。

「君は、友達になってほしいって言った人全員にこんなことしてるの？」

「そうね」

「……」

「だって友達になってほしいって言ったのはあなたで二人目だもの」

「一人目はどんな人？」

「人間だったわ」

ふざけんなよ、このビッチ！

なんて普通だったらきっと叫びたくなる。友達が人間かどうかなんて当たり前のことだから。普通だったら。

一人目は人間だった。過去形だ。

……人間じゃなくなったか、もしくはもうこの世に存在しないか、両方か。

だからエスは僕がやってほしいことをやるんだ。

二度と自分から離れないように。

「あのね、やってほしいことはいろいろあるはずだよ。ぼ、僕だって中学生だけど、お、男なんだからね？」

アンチカテゴリ同士の無意識はつながってる。

エスは自分の名前を忘れるくらいに『エス』に触れたらしい。

だからエスは僕の無意識を知る方法を知っている。

む、難しいけどたぶんそう。

それにどこかで『エス』に触れた僕はそれが真実だろうと根拠も

ないのに思った。
「でも、やってほしくないって気持ちもあるんだ」
「そうみたい。ごめんなさい」
「エス、やっぱり僕の心、わかるの？」
「少しだけ。あなたの『エス』が知ってほしいって思ってること、それに強い願望だけなら」
それならいっかなぁ……。
もしこれからも知られたくないことをはっきり知られるようだったらエスから離れてどこかに行こうと思っていた。当てなんて全然ないけど。
「いろいろ、思うかもしれないけどさ、もしこれからも一緒にいるなら、僕が口でしゃべって頼んだこと以外はやらないでほしいんだ」
エスは目を丸くして驚いた。
「一緒に……いてくれるの？」
「友達だからね」
「私のせいでアンチカテゴリになったのに？」
「いいよ、別に。気にしてない」
責める気なんて少しもなかった。
「だから約束。指きりでいいかな？」
「指きり。……ええ」
僕の小指とエスの小指が絡み合った。
「ごめんなさい、亮一」
ありがとう、じゃなかった。

僕は今日化け物になった。
化け物になってエスの友達になった。
普通なら許されないことなのかもしれない。
二人も人間を喰った、たぶん僕の見ていないところでもっとたくさんの人間を食べているエスの隣に立つなんて。

だけど僕には自分を見捨てた人間の隣より、自分を必要としてくれた彼女の隣に立つことが自然のように思えた。
エスに会わなければどうせ死んでいた。
もう少し生きていようと思った。

少し、お腹が減った。

アンチカテゴリについての私論・その２

アンチカテゴリについての私論・その２

アンチカテゴリをタブー視する認識を世間はぜひに改めてもらいたい。

アンチカテゴリは誰かと関わりを持てば関わりの深さだけ敵意を持たれてしまう。

だから殺される、とはいえ行方不明者に対する猟奇事件の数があまりにも少なすぎる。その他の患者は保護されたと考えるのが自然であるが、ならば政府は保護施設の場所をどうしてひた隠しにしているのか。患者とその家族の人権を守るためだけとは考えにくい。

それに政府は感染はないと言っているが私個人は感染はあると考える。アンチカテゴリ発症者の近辺で行方不明となったアンチカテゴリ患者らしき目撃情報がいくつかあった。ウィルス性でないのは確実だが、どのようにして感染ルートを確保しているのだろうか。

また、感染以外にも発症するパターンがあるようだ。

虐待の末に亡くなった子供の何割かがそれに該当すると思われる。監禁のような扱いを受けた子供が外を出歩いて感染したとは考えられにくい。

もしかするとそのような子供がアンチカテゴリ発症の女王蜂になっているのではないだろうか。女王蜂に刺された人は働き蜂となり感染者を増やす。女王蜂ならではの特性だって持ち合わせているはずだ。

なぜアンチカテゴリなどという病気が生まれたのか。

ここにアンチカテゴリ治療のヒントがあると私は考える。

2・人形が見る夢　―1

2・人形が見る夢

私は誰？

◆◆

『生まれたばかりの女児が行方不明！　犯人の姿は監視カメラには映らず』

『監視カメラに死角あり！？　院長発言「業者が悪い」　院長としてはあまりにも無責任な発言』

『……あれは病院の管理体制が悪いでしょう。もっと大きな事件が起きた可能性もありましたね。赤ん坊一人がいなくなったくらいですんで幸運でしたねー。病院にははっきりと責任を取ってもらいたいものです。え、犯人像ですか？　この場合不妊に悩む女性が赤ん坊を連れ去るというのが一般的な見解ですが、連れて歩いている女性がいないということは、やはり最近の如何わしいゲームに影響された人間の仕業ですね。最近の若者はゲームばかりで生身の人間に触れようとしないから……』

『犯人の手がかり見つからず。乳児の生存は絶望的』

『……昨夜未明、××病院の院長が部屋で首を吊って亡くなってい

るところを起こしに来た家族が発見し警察に通報しました。遺書が残されていることから自殺であると判断、院長は常日頃から家族に「もう死にたい」とこぼしており……』

◆◆

誰も俺の価値を理解しようとしない。
病院の清掃なんて俺に相応しくない仕事を押し付けやがって。
だがそのおかげで監視カメラの死角に気付いた。
俺は気付いた。病院の清掃なんて仕事をやってるのも、カメラの死角があるのも俺がずっと欲しがってるものを手に入れるために違いないと。
だから捕まる危険を冒して人形の素を手に入れた。
あとは何も世界を見せず、ずっと閉じ込め、自分だけの人形を創るだけ。
安い家を買って中を改装した。人形に相応しい世界を俺が造ろう。余計な物は何一つ侵入させやしない。なんてすばらしいアイディア。なんてすばらしいセンス。認めない奴こそセンスもアイディアもひねり出せないつまらない人間だ。
美しく育つように餌は定期的にあげよう。運動だって狭い部屋の中でできる限りのことをさせる。太陽の代わりになる機械があって本当によかった。

なのに。
こんなにこんなに大事に育ててあげたのに。
どうしてこの人形は大きくなろうとするんだ。

理想は百四十センチ。だがこの人形はそれより五センチ以上も育ってしまった。放っておけばもっと理想から外れてしまうだろう。
餌の量を減らすべきか？　それでは美しい顔がこけてしまう。

手足を折ってしまおうか？　美術品としての価値が下がってしまう。
じゃあどうする。この人形はもう俺の理想の人形じゃない。これだから人間というのは、すぐに俺に反発しようとする。
仕方ない。犯そう。
犯して俺との間に子供を産ませよう。
ここまで育て上げた人形と俺の間に産まれるんだ、きっとその子はこの不完全な人形よりもすばらしい人形に違いない。
俺は人形を押し倒した。
無垢な瞳が俺を見つめてくる。糞が、どうせお前も人間の女なんだからいつか俺以外の男に股を開くんだろう。ここまで育ててやった恩くらい返してもらってもいいはずだ。
「お父様、お腹がすきました」
「そうかそうか、じゃあ今からたっぷり食わせてやるからな」
「いいえ、お父様。『エス』が食べたいものは食べ物ではありません」
「エス？　何のことだ？」
「お父様。……いい加減その臭い口を閉じてくださいまし。いいえ、もう消えてくださいな」

◆

私の名前、何という名前だったかしら。
最初に思ったことはそれだった。
さっきまで目の前にいた男が呼んでいた名前なら知っている。
でもそれが自分の名前だとは思わない。
きっと彼女は一度死んだんだ。
そして自分が彼女の体を使ってこの世界に生まれたんだ。
彼女はとても目の前の男を愛していた。もちろん、父親として。

彼女はそれなりに幸せだった。他に比較対象がないのだからそう思うしかない。
彼女の『お父様』は最近優しくなくなっていた。何か機嫌を損ねることをしでかしたんだ。聞いて更に機嫌を損ねることもわかっていた。

でも本質はそこじゃないの。

彼女は人として扱われたことなんて一度もなかった。

あの人はお父様。
私はお父様の人形。
人形ならどうして自分で動けるの？
人形ならどうして自分で考えるの？
お父様はお父様。
私は……誰？

自分に問いかけた。
何度も問いかけた。
暗く狭い部屋で何度も何度も。
この世界には彼女とお父様しかいなかった。
それ以外に自分の意志でできることなんて一つもなかった。

『あなたはね、『エス』っていうの』

その声は内側から聞こえた。もしかしたら自分の口から出たかもしれない。
とにかく声を聞いたときに彼女は死んだ。
大好きにならざるをえなかった『お父様』がとても汚い生き物に見えた。

だから消した。

お父様は私になった。
それが存在を食べるということ。
お父様の知識は私の知識に。
お父様の経験は私の経験に。
お父様の……お父様の考えていたことが私の考えていたことに。

お父様は本当のお父様じゃなかった。
そうだとしても彼女はとても幸せでした。幸せになるしかなかったのです。
だから人形として不要になったのならそのまま殺してほしかったんです。何も知らないままきっと彼女は幸せなまま死んでいただろうから。

――私はあなたのために生まれてきたんじゃない。

◆

今までお父様の私室だから入るなと言われていた扉を私は開けた。
ひんやりとしたノブを回して扉を押す。
目に何かが刺さった。眩しい、光。
それが『太陽』だということはお父様が私の中にいるからわかるのだけど、こんなに強く痛いものだなんて。
お父様の見ていた世界とこれから私が見る世界は違うんだ。
ドアを閉めて部屋の中に戻ろうかと思った。きっと扉の『中』は自分の知らないものばかりだ。恐ろしいものだってあるはず。世界はお父様には優しくなかった。いつも敵意をお父様に向けていた。
もし私がそんな敵意を向けられたら耐えられるだろうか。

『だけどあなたが欲しいものはここにしかないわよ』

また声が聞こえた。もしかしたらただ考えただけかもしれない。

だけど欲しいものがここにしかないのなら仕方ない。私は中に入ることを決めた。

お父様がくれた黒い傘を広げて扉を開けた。強い光は黒い布に遮られて私の肌まで届かない。これなら大丈夫そうだ。

それにここは『中』じゃない『外』だ。

初めての外。

世界にはたくさんの物がある。

四角い積み木のような灰色の建物の横に、赤と白の屋根の派手な建物がある。その隣には緑の木が並んで植えられている。

全部ばらばら。

人だってそうだ。

黄色い帽子をかぶった子供達が、黒と赤のランドセルを背負って跳ねるように私の横を駆けていく。おそろいの青いシャツを着た集団が「いちに、いちに」と走っている。薄い緑のスカートの女性とこげ茶色のスーツを着た男性が談笑している。

ばらばらなのに違和感がない。

歪なのは私だ。

あの世界も歪だった。黒と白しかない部屋や目が痛くなるような強い桃色の部屋。お父様が余計な物を入れないように苦心した世界。だからこそ歪。

あの世界にいた私も歪。

歪な私は歪じゃない人々からちらちらと視線を投げられた。だけど向こうから声をかけてくるようなことはない。

かけたいならかけてもいいのに。でもそれを伝える方法を私は知らない。

こちらからならどう声をかければいい？

『ごきげんよう』

お父様に何度もやらされた人形らしい挨拶。でもそれで正しいのかはわからない。
だって私が持っているお父様の記憶では、お父様がどんなに周りに話しかけてもお父様の望む答えは返ってきてないのだから。
結局外に出ても生き方がわからない。
帰ろう。帰ってあの小さな世界で眠るように死に落ちよう。
そう思ったのに
「わ、君、すごい格好だね」
私の正面に誰か立って声をかけてきた。
傘を少しずらして視界を広げてみた。
目の前にいたのは女の子。身長は私よりも少し高い。茶色く長い髪の毛は桜色のクリップで一つにまとめて涼しそう。薄い黄色の半袖からは小麦色の腕がのぞいている。何もかも、やっぱり私と違う。
「わわ、顔もすごく白いんだね。ていうか顔色悪いよ！？　どこか具合悪いの？」
彼女が急に顔を近づけてきたから私は固まってしまった。返事もできない。
「まぁ、一年中外走り回ってるあたしと比べたら皆不健康に見えちゃうけどさ。ってゴメンね、いきなりこんなこと言っちゃって。んー、とりあえず、あたし西若（にしわか）　七日（なのか）って言うんだ。あなたは？」
黙りこんでいたら自己紹介までしてくれた。
どうして彼女が声をかけてきたのかはわからないけど、彼女ならどんな挨拶しても受け入れてくれるかもしれない。
スカートの裾に両手で掴み一礼。
「ごきげんよう」
掌には汗をじっとりかいていたし、脚はかたかたと震えていた。怖かった。怖いことが知られることも怖かった。
「映画のお嬢様みたいな挨拶するんだね。あ、笑ってるわけじゃないんだよ、あなたに似合ってると思うよ。名前はなんていうの？」
「私は、エス」

「エス？　外国の人みたいな名前だね。あ、そっかハーフなんだ。だから色が白いしそんな格好してるんだね」
何も説明していないのに彼女は、七日は勝手に納得してくれた。ほとんど間違っていた。だけど彼女を否定することはできない。
だって真実を話してきっかけを失うのは嫌だった。
「ねぇエス。今から時間ある？」
私は頷いた。
時間ならたくさんある。
これから何をすればいいのかわからないくらいに。
「よかった。立ち話もなんだしね。こっちおいでよ！」
七日は私の手首を握って走り出した。足元をもつれさせながら私も急ぐ。
とても温かかった。

◆

七日が連れてきてくれたのは公園という場所だった。
「ちょっとここに座って待っててね」
白い長いすに私を座らせて、七日は一人で駆け出した。孤独を感じる暇もなく彼女はすぐに戻ってきた。
「おまたせっ！」
髪を揺らしながら彼女は戻ってきた。あんなに速く走ってきたというのに息一つ切らせていない。やっぱり私とは違う。
彼女の右手には細長い筒が握られていた。
「レモンティーとミルクティーどっちが好き？」
「どちらも好きよ」
正確には嫌いだということを私は教えられていない。何もかも肯定することだけを教え込まれた。
でもそれは死んだ彼女の話。
これからの私はどうなんだろう。

「ん、じゃあミルクあげるね」
ひょいっと白と茶色の筒が私の手の中に放り込まれた。冷たい。慌てて落としてしまいそうになるけどしっかりと掴み取った。
「わ、大丈夫？　ごめんね、つい」
七日は自分の渡し方が悪いせいだと思ったようだ。
「いえ、少し驚いただけだから」
私は手の中にある金属の筒を見つめた。こんなものは私は初めて見る。紅茶はいつもティーカップから注いでいた。
「どうしたの？　もしかして外国から来たから開け方しらない、とか？」
七日は心配そうに私と金属の筒を交互に見た。
「いいえ、知ってるわ」
私は知らない。
でも私は知っている。
私になったお父様なら知っている。
これは缶ジュース。このプルタブに指をかければ大丈夫。
七日が缶の先の指を心配そうに見つめているから私は力を入れた。けど、知っていた知識よりもずっと力が必要だった。
お父様と私は違うんだ。
冷たい紅茶を飲むのは初めてだ。喉を通る液体はとても甘くてミルク臭い。私の知っている紅茶じゃない。おいしくないのが申し訳なくて、私は七日に別のことを尋ねてみることにした。
「七日はどうして私に声をかけたの？」
「んー、どうしてかな。なんていうかね、声をかけてほしそうだったから。違ったらごめんねー？」
「いいえ、謝らないで」
実際そうだったのだから。
「あたしもね、四年くらい前にこの街に引っ越してきたんだ。今はたくさん友達もいるけど、あの時は誰も声をかけてくれなくてさみしかったなぁ。だからエス見たとき思ったんだ。あ、この子声をか

けてほしいんだって」
「……七日は寂しかったの？」
この人が寂しい？　私と同じように？
それはとても信じられないことだ。
「うん、三年前はね。でも今は寂しくないよ！　ねぇエス。まだ時間ある？」
「時間ならたくさん」
「んじゃ遊びにいこっか！　お金の心配ならしなくていいよ！　あたしが出したげる。バイトしてるからだいじょびだよ。どーんとこの七日様にお任せなさいっ！」
七日は思い切り自分の胸を叩いた。強く叩きすぎたのか、「んげほっ」と咳き込む。
「……ふふっ」
おかしくなって私は笑ってしまった。
あの世界から出て初めて私は笑うことができた。
「あ、笑ったな。んじゃつきあうの絶対だよ！　遠慮なんかしたらダメだかんね！」
七日は私の手を掴んでまた走り出した。

◆

七日が最初に連れてくれたのは小物屋さんなんだろうか。桃色のウサギや緑色のクマのぬいぐるみが売られている店。びっくり箱で七日が驚かせてくれたので私も動いて歌う花で七日を驚かせてみた。
次に来たのはピザ屋さん。熱いのを知らずに食べてヤケドした私に七日は笑いながらお水を差し出してくれた。
知識はあるくせに何も経験したことがない私に七日はいろんなことを教えてくれた。
街が暗くなりかけた頃、私はきらきら光る店の横にある大きな箱に視線を奪われた。

人形が透明な箱にたくさん入っている。まるで――ほんの少し前の自分を見ているみたい。
「あれはねーあの中のぬいぐるみを取るゲームだよ。やりたい？」
外国から来たと勘違いしたままの七日は聞かなくてもいろんなことを私に説明した。
「……いえ」
いくら外の世界を体験したことがなかった私にもこれまで七日がたくさんのお金を使ってくれたのはわかる。お金は大切なものだ。お父様はお金が欲しくてたくさんの人と喧嘩した。……七日もお父様と同じように誰かとみにくい争いをするのだろうか。それは、なんだか嫌だ。
「遠慮しなくてもいいんだよ。あーでも、あれ取れるまでやるといくらでも使っちゃうんだよねー……じゃ、五回までだね。五回分入れるね～」
止める暇もなく七日は箱の横の小さな穴にお金をチャリンと落とした。
「まずはあたしがお手本見せるね。ここをこう押して～……うん、こうすると中のクレーンが動くんだよ。そしてあの穴の中に人形を落とすと人形をゲット！　なんだよ」
七日が箱の横のボタンを押すと、中の機械が動き出し静かに下りた。そして猫のぬいぐるみを掴み、そうになるだけで猫はするりと箱の中に落ちてしまった。
「わわっ惜しかったんだよ、もう一回……ってエスがやるぶんがなくなっちゃうね。エスどうぞどうぞ」
「あの、私は別に」
「いーからいーから！　本当に遠慮しなくていいんだからっ、もーかわいー子なんだから、うりゃーっ！」
「きゃっ」
七日がいきなり抱きついてきた。私は動くこともできずに倒れないことだけを考えてその場に硬直した。

「あ、あのっ」
「んー、細いしちっちゃいし、あたし一人っ子だから妹欲しかったんだよねぇ、この子なでなでしちゃう。……あ、なんかヤバイ気持ちになってきちゃった。んふふ、エス。禁断の百合愛とか興味ない？」
「禁断……？」
「もーじょーだんだよー！　そんなに本気で怖がらなくてもいーんだよっ。というわけでっ、ゲームはあたしのおごりね。そんなに返したいならまた今度でいいんだよっ！」
「また、今度……」
そんなときがまた来るんだろうかと不安に思っているうちに私は七日に背を押されて箱の前へと押しやられた。
箱の中にはたくさんの人形、ぬいぐるみ。
彼らの目には私がどう映っているんだろう。
外に出られておめでとう？
それとも人形のくせに外に行くなんて？
「どれにしちゃうか迷っちゃうよね～。最初なら掴みやすいのがいいよ。丸いのじゃなくて～、あれみたいに首がちゃんとあるものとか」
七日は黒い服を着た女の子の人形を指差した。黒い小さい羽が背中についた人形だ。何かに似ている気がする。でも何なのかはわからない。
「ではあれを……」
「わ、エスがんばる？　がんばっちゃえー！」
私はボタンを七日みたいに押して機械を動かした。機械は人形のだいぶ上で閉じて何も掴まずに元の場所に戻った。
「最初だからしょうがないよ！　えーと、あと三回か。がんばれー！」
えいえいおーと七日が後ろで片手を上げながら応援してくれる。
「……がんばるわ」

知らないうちに口元をひきしめていた。七日が後ろで見てる。がんばらないと。
二回目。人形の横に機械が埋まる。
三回目。人形の頭を掴むけどするりと逃げる。
「わわ、おしいんだよっ」
七日が拳を握りしめながら悔しがった。
そして四回目。最後。機械は人形の首じゃなくて小さな腕を掴んだ。
「わわわっエスすごいんだよっ！」
ゆっくりと動く機械を見守る私達。――だけど。
「ねー次どこ行くー？」
店から出てきた集団の一人が強く箱の側面にぶつかった。その拍子に人形はするりと逃げ出し、人形の山の中に落ちてしまった。その一人は「いったー」と笑いながらどこかに行ってしまった。
「わぁーっ！？」
黒い人形は落ちた。そして落ちたところで不安定さを保っていた丸いぬいぐるみがてんてん……と穴の中に吸い込まれるように落ちていき……。
「……ふ、複雑な気分なんだよ……」
箱の下から取り出した丸いぬいぐるみを持ちながら七日は呟いた。
「えと、最初に狙っていたものとは違うけど、エスおめでとう！」
はい、と七日はぬいぐるみを私にくれた。正直な感想を言うと、目が離れすぎてあまりかわいくない。七日もそう思ってるのか「い、いらない？」と不安げに尋ねてきた。
「いいえ、いただくわ。ありがとう」
私が受け取ったのは丸いぬいぐるみ。
黒い人形は箱の中。あの子を出してくれる人はいるんだろうか。
いいえ、きっと自分で出なければ意味がない。だからこれでよかったんだ。
「わ、そうだそうだケータイ持ってる？」

「ケータイ」
ケータイ。携帯。携帯電話のことだ。
「いえ、私は持っていないわ」
「やっぱ外国から来ると手続きとか大変そうだもんね。じゃあ明日は暇？」
「……ええ」
「だったら明日、そうだね四時くらいにあそこの公園のベンチで待ち合わせ。どう？　今度はあたしの友達も連れてくるよ。嫌だったら約束ぶっちしちゃってもいいんだよ」
「お友達、ですか」
七日のお友達。どんな人なんだろう。七日のような子なんだろうか。
それなら、たぶん、一緒にいてもいい、と思えてくる。
「……嫌じゃないわ。必ず行くから」
「そう？　んじゃエスの家どこ？　送ってあげるよ！」
「それは……」
もしもあの歪な世界まで見られたら
七日は私を人間だと思ってくれるだろうか。
「もしかしてエス、用事とかあるの？」
「え、ええ。これから、少し」
「わ、そーなんだ。遅くまで連れまわしてごめんね！　道はわかる？」
私はうなずく。
「じゃエス。……っとその前に、改めて……あたしと友達になってください」
七日が私に手を差し出す。意味がわからず首をかしげてみると「握手だよ、握手！　えっと、他の国の言葉じゃなんていうんだろう……ハンド？　違うよね……」と七日は一人で悩みはじめた。
握手。確か手と手を握り合うこと。
私は七日の手を両手で握りしめた。温かくて、柔らかかった。

「友達に、なってくれますか？」
「もちろん！　んじゃ、また明日ね！」
七日はぶんぶんと手を振りながら元気よく横断歩道の向こうへと走り出した。道の向こうで私の方を一度だけ見て、ぶんぶんと手を振っていた。私が小さく手を振りかえすと満足したのか、今度こそ七日はいなくなった。

彼女のように世界が優しいのなら、私はここにいてもいいのかもしれない。

◆

そんなわけないでしょうに。

『欲しいもの、あったでしょう？』

私の中の私がまた話しかけてくる。
欲しいものはあった。
それは二つ。
一つは私をこの世界から出してくれるきっかけ。鍵。友達。七日。
もう一つは今までに食べたことのないもの。血。肉。人。七日。

食べたい。

七日の引き締まった腕はどんな歯ごたえなんだろう。お腹はみずみずしくて柔らかい果実のよう。きっと頬の肉は甘くて、缶の紅茶よりずっとおいしいはずだ。

でもこんなことを七日に知られたら、きっと七日はもう私に笑いかけてくれない。

七日さえいなくなり今度こそ一人になった私はぽつぽつと歩き、あの小さな世界に戻ってきた。歪で独善にあふれたとても小さな世界。

とてもお腹がすいていた。

紅茶を入れてクッキーを食べたけど、クッキーはぱさぱさして煉瓦を食べてるような気分で、紅茶にいたっては臭い水を飲んでいるよう。

こんな紅茶もクッキーもいらない。

もし食べるとしたらそれは、

『あたしと友達になってください』

七日の笑った顔が脳裏をよぎる。

あまりの恐ろしい考えに私は頭を振ってかき消そうとした。無理だった。

彼女を食べるなんてそんなこと、できるわけがない。

だって彼女は友達だ。私の初めてできたお友達。

彼女を食べてしまったらきっと、あの世界はもう私に優しくなんかない。

それにこの気持ちが少しでも彼女に知れたら。彼女はどんな目で私を見るだろうか。

恐怖？

侮蔑？

怒り？

どんな表情かはわからないのに、なぜかお父様が最後に私に見せた顔に似ているような気がした。

怖い。怖い。怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。こわい。

どうすればいい？

彼女を失いたくない。たった少しの出会いなのに、彼女の存在はもう私にとってかけがえのないものになっていた。

『どうして？』

内側から問いかける声。

『どうして怖いの？　前と同じになるだけなのに。それに失うのが怖いのならまた作ればいいのよ』

そして繰り返すの？

『ええ。ずっと、ずぅっと、飽きるまで』

私の中の私がそう囁いていたけれど、私は絶対に頷くつもりはなかった。

2・人形が見る夢　―2

「んー、明日はどこいこっかな」
自宅のベッドで情報誌を広げながらあたしは呟いた。
あたし、西若　七日がこの街に来たのは四年くらい前。小学六年生のときだ。
友達は中学になってから作ればいい、今は街に慣れることが先決。両親はあたしのために数ヶ月早く引越しを決めた。
それはとても感謝している。実際そのとおりだったし。
でも中学にあがるまでの数ヶ月は本当にさびしかった。いじめはなかったけどこっちが話しかけても返事は敬語。同じカテゴリには絶対入れてくれなかった。
新しいカテゴリになじむのはとっても難しいことだと思う。爪弾きにされたら孤独、運が悪かったら敵視。子供だからこそよけいに厳しい。
でもそんなのはカテゴリの中の誰かが心を許せばいいだけの話。
だから決めたんですよ、あたしは。
もしさびしそうにしてる子がいたらこっちから声をかけてあげようって。
「エスって外国の人っぽいけど話すのうまかったんだよねぇ、帰国子女って子なのかな？　そーゆー子が喜ぶとこって行ったら……うーん……そだね、昼休みにでも皆に聞いてみよっと」
明日はバイトはないけど朝練がある。
だからもうねよっと！
明日も楽しい日だといいなー。
……。

「って目覚ましかけるの忘れてたーっ！」
窓からのまぶしい朝日に起こされてあたしは叫んだ。
頭近くに置いてた目覚まし時計の針はちょうど八時。
……全力で走れば朝練に間に合う！　もちろん他の作戦を執行する時間はありませんぞ大佐、さーいえっさー！
転がるように玄関まで走ると、玄関の方からお味噌汁のいい匂いが届いた。
「七日ー、朝ごはんいらないのー？」
そして誘惑の声まで！
大変です大佐！　朝ごはんと聞いたとたんにおなかが反乱を起こしてあたしの意志を乗っ取ってしまいそうです！　だめです、一分一秒の猶予もありません！
「いっ、いらない！」
ひかれる後ろ髪を断ち切ってあたしは玄関の扉を開けた。
六段ぶんの階段を一気にジャーンプ！
硬いコンクリが脚に響くけど、気にしてる暇はない。急いで学校行かないと！
あたしの高校は歩いて行ける場所にある。陸上が強いのもあるけど、本当はどこよりも近いって理由で選んだ。うん、正解だったと思うよ。
タイムを計ってもらいたいくらいダッシュダッシュダッシュ！
校門はすぐに見えてきてあたしは中で一息ついた。
何人かの知ってる部員達が道具を倉庫から引っ張りだして準備をはじめてる。でも全員そろってない。よかった、間に合ったみたい。
あたしは見知った仲間達に手を振った。
「おーい、おっはよー！」
皆があたしの方を見る。でも挨拶は返ってこない。
「あ、あれ？」
一人がす、とあたしの頭を指差した。
「寝癖、ひどいよ」

「わ、嘘。わわっ」
慌てて頭に触ってみた。うぅっ、本当だ。前髪とか後ろとかすごいことになってる。
「わあー、ちょっと直してくるねっ！」
ここから近いトイレってどこだっけ。それとも教室行った方が早いかなぁ？　とりあえず校舎の中に入って考えよう、あたしは昇降口へと急いだ。
でも寝癖を直す時間はなくて変な髪形のまま部活して、授業へ。
「わ、寝癖全然直んないよ……」
朝からずっとはねたままの前髪を触りながらぼやいてみた。何回か水でなでてみたけど乾くたびに反抗してくる。むむ、こいつ思春期の中学生かっ！
次の休み時間にミストかムース貸してもらおっと……。
でも次の授業なんだっけ？
今がつまらない古典だから、次は……
「……って家庭科だよ」
家庭科の授業は家から包丁持参。忘れてきたら貸してもらえるけど宿題決定。もちろん寝癖に気付かないほど急いでたあたしが持ってきてるわけもありませんでして。
「うぅ、宿題やだよー」
あたしは机の上にぺたんと顎をついた。
休み時間の間に貸してもらわなきゃいけないから寝癖を直すヒマもないし。
でも授業中に怒られて目立つのもやだから授業が終わるとそっこーで家庭科室へと急いでみた。急げば寝癖を直す時間くらいできるかも。でも。
「あれ、先生がいないな。やっぱり先にムース借りたほうがいかったかなぁ」
家庭科室には誰もいなかった。
ちょっと後悔しながら誰か来るのを待つことにした。っと思って

る間に誰か来たぞ。うらやましいことにちゃんと包丁を持ってきてる。忘れた自分が悪いんだけど、ね。
「あ、湊にマキー！　寝癖直すからムースとか貸してほしいんだけどー」
クラスメイト兼親友の二人に駆けよると、小さいマキの方が「ひっ」と何かに怯えたような声を出した。
「わわ、何？　もしかしてゴキブリ！？」
足元を確かめるけど何もいない。……ゴキブリってすばやいしね。
「ゴキブリがいたならちゃんと言ってよ～」
私はマキに近づいて肩を叩こうとした。
「こ、こないで！」
ヒュッ。
「えっ？」
何が起こったんだろう。
マキが、手に持っていた包丁を、あたし目がけて、振りかぶっていた。
「やめてっ！」
反射的に腕を払った。少し切られた腕が痛い。痛いけど、どうして。
「わ、ど、どうして？　落ち着いてよ。何か悪いことしちゃったかな？　ごめんね、あたし鈍感だからあんまり気付かなくて……っ！」
「いやあああああ！！」
隣にいたもう一人、湊が悲鳴をあげながら突き出した。鈍く光る包丁を。あたしに。
湊の横をすり抜けるようにあたしは家庭科室から廊下へと躍り出た。
「わ、わわ……あ、あたしたち友達だよね、仲間だよね？」
仲間といわれた瞬間二人の顔に浮かんだのは隠そうともしない嫌悪感。こんな拒絶、三年前にも見たことない。
二人ともこっちに包丁を向けて震えてるし、あたしは何も持って

いないっていうのに悪いのはあたしの方みたい。
え、どうして？
どうしてどうして？
本当にあたし
殺されるようなことなんてしてないはずなのに！
「お話は、無理かな……」
廊下の向こうから見慣れたクラスメイト達の姿が見えた。
「ご、ごめん、ちょっとたすけ、て……」
他の子に仲介してもらえばなんとかなると思った。でも違った。
どの子もあたしの顔を見るたびに悲鳴をあげたり逃げ出したり。皆、湊やマキと同じ反応。
「わ、嘘。嘘だよ。びっくりさせようとしてるんだよね……？」
戸惑いすぎてその場に立ちすくむ自分の後ろ、親友だった二人が動いた気配を感じた。
「わ、わあああああ！！」
走った。
廊下の右からも左からも知り合いはやってくる。あたしと違う方向へ逃げ出す生徒。悲鳴をあげながら立ちすくむ生徒。誰も、誰もあたしのことは助けてくれない。
いったいどうして？
意味わかんないよ。
ただわかることは一つ。
このままここにいたら皆に殺されてしまう。
どこかへ逃げなきゃ。
あたしは親友達を弾き飛ばすように走り出した。何も見ずに何も振り返らずに。
だから親友達の一人があたしの横腹に包丁を突き出したことに気

付いたのは、もうどうしようもなくなってからだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆

待ち合わせの時間は四時。
でも私が長いすに座りはじめたのは朝の十時から。公園の時計塔を見ながら『１０』の印から『４』の印までいくつあるかを数えてみた。むっつ。六時間。チクチクと少しずつしか動かない長い針が何周したら四時になるんだろう。途方もないように思えた。
でも他にやることなんてない。それにあの黒と白の世界にはもういたくない。その理由があるならどんな理由でもいい。
それに友達を待つのは案外心地いい。
私は日傘をくるくると回しながら七日を待った。
「七日様のお友達はどんな方なんでしょう」
世界にはもっとたくさんの人がいる。
たくさんの、存在。
もう声は聞こえない。
あれは誰？
あれは私？
私は誰？
昔の私はどこに行ったの？
どうして、と聞いてももう答えてくれる声はないし、答える必要もない。
……あんまり考えたくない。
私は私の世界が見たい。生まれて初めてそう願った。
せめて一度は人として生まれてきたのだから。
「わ、エス……もう来てたんだ……早すぎるよ……」
待ち望んだ声。でもすごく弱々しい。七日だ。

傘を持ち上げると、そこには脇腹を押さえながらよろよろと歩く七日がいた。顔は青白く、昨日のような血色いい肌が嘘のよう。
私の顔を見ると力なく微笑み、そのまま膝が崩れた。
「七日！」
私は傘を投げ捨て七日に駆け寄った。七日が地面に頭を打ちつける前に私は手を差し出すことができた。七日の体が重みを預けるように私に傾き、錆びた鉄のおいしそうなおいしそうな匂いが私に届いた。
お腹を押さえている七日の指の間からはどくどくと血が流れている。なんて美しい色をしているのだろう。私は唾を飲み込んでしまった。
……友達になんて気持ちを。
私は唇を噛み締めて自分への罰とした。
「どうしたの、七日。私はどうすればいいの？」
こんな大きな怪我は知らない。
どうすれば？
私の知らない誰かに必死に聞いてみた。
「病院、救急車」
「……びょ、病院、はいいよ……たぶん、変わったのはあたし、だから、治してくんない……いたっ……でもエスは、昨日と一緒だから、よかったなぁ」
「私は一緒……昨日と一緒……」
七日の言葉を繰り返す私。
変わったのは七日。私は一緒。
本当に？
七日と会う前の自分はもういないのに、自分の知らない知識が増え続けるのに。
『友達になりたいと思ったんでしょう』
だから？

『だから友達にしたの』
七日はもう友達よ。
『いいえ。関われば関わるほど七日は私を嫌いになるわ。好きなほど嫌いに。嫌いなほど嫌いに。だから
エスが新しいイドをあげたの』
新しいイド？

「エス……あのね、エス……」
苦しそうに何かを言おうとする七日。
声が聞こえないから私は顔を近づけた。
突然、七日が私の唇に噛み付いた。七日の頭はすぐに私の膝の上に落ちた。
「ご、めんね。いきなり。なんでこんなことしたんだろうなぁ、あ、あたし、別に女の子、好きってわけじゃない、のに。き、きのーのは、ほん、とーに、じょ、だんなんだよ……？」
「……ええ」
私は答えた。唇にできた新しい傷から流れる血をぬぐわずに。
好きや嫌いじゃない。
私と同じ感情を七日も持っている。
七日の顔色はますます悪くなって、視線はどこを見ているのかわからないくらいに虚ろになった。
七日は助からない。
このまま死んでしまう。
例え何も知らなくてもそれだけはわかった。
七日は私にどうしてほしいの？

それは、もう知っていた。

「七日、痛い？　苦しい？　早く終わらせたい？」
荒い息で私を見つめながら、私の言葉の真意を読み取ろうとする

七日。
「……そうだね。これが夢なら、早く終わらせたいな」
「いいえ、違うわ。あなたはこれからずっと夢を見るの。私と共に歩き、共に生きる夢を」
「夢？　……よくわからないけど……友達と一緒にいられるのなら、どこでも……」
友達とは私のことだ。
これから私は彼女を、友達を裏切るのかもしれない。
それでもこのまま苦しみながら死に至る彼女を見るよりずっと。
それが私の自分勝手であることを知りながらも。
私は彼女に囁いた。
人形のように冷たい声で。
「あなたは私になるのよ、七日」
七日の眼が驚愕に開いた。だがすぐに納得したかのように瞼を閉じた。このときの七日の気持ちは今でもわからない。

◆

七日は消えた。
いいえ、七日は私の中にいる。
七日の血が私の血になり、七日の肉が私の肉になり、七日の思考が私の思考になる。
それを食べたというのなら食べたのだろう。
もしかしたらあの小さな世界にいた私はとっくの昔に食べられていたのかもしれない。
私はいったい誰になっていくんだろう。
きっとそれは――化け物に。

私が人でないというのなら私が人になれる世界を創ればいい。
そうでないときっと意味がないのだから。

幕間・とあるファーストフードにいる子供について

その倦怠感が食事の後だからか、それとも長い間『食事』をとってないからかなのかはわからないけど。

「……ふぁ」

ボクはファーストフード店の二階に作られた飲食席のはしで小さくあくびをした。

「さてと」

そろそろここを出ようかな。

「ねーきみきみ、そこのかわいいきみ。一人？　学校はいいの？」

……なんて思ってるうちに変なのに声かけられた。今度出かけるときは帽子とサングラス忘れないようにしよっと。ボクってかわいいから本当困る。

本当にね、困るんだよ。

下からにらみつけると少し怯んだ。けど

「そんな怖い顔しないでよ～。平日にこんなとこで一人ってことは暇なんでしょ？　カラオケ行かない？　ボーリングでもいいよ。それとも、別のとこ行く？」

「トイレ」

ボクは席を立って横にある扉に向かった。

赤い色のスカート着た目印と、青い色のズボン着た目印の、せっかくだからボクは青い方の扉を選んだ。

「女の子がこんなとこ入ったら危ないよ～。でも客いないからいっかぁ」

何か勘違いした男がデレデレした顔でボクの後ろをついてくる。

ばーか。

数十秒後、男は慌ててトイレから出て行った。さすがに自分と同じモノ見たらひいちゃうよねぇ、あはは。

この程度なら大丈夫だろ、たぶん。すぐ忘れるだろうし。それに

ああいうタイプは結構友達多いからね。意外とうまくやってけるタイプ。
それにもしアンチカテゴリになったら、後始末してあげるから。
「そんなにボクって女の子に見えるかなぁ」
さっき会った亮一って奴も、たぶん勘違いしたまんまだ。
「ちゃんと本に載ってるのと同じ格好してるのに……」
今度はもっと男らしい格好にしよう。

――そんなに一生懸命人間のフリしてどうするんだい？

「……フリなんかじゃないよ」
ボクは目の前にいない誰かに答えた。

◆

少し前。数日前というべきかな。
ボクは一人の女子中学生を、といっても喰われる側ってことは彼女もアンチカテゴリなんだろうけど、よってたかって二匹で喰ってる化物達を見つけた。
普通の『人間』からみたらそれはなんでもない光景だったかもしれない。女子中学生が倒れるところくらいは見えたかもしれないけど、まさか焼かれて切り刻まれて喰われている最中だなんて思いもしないだろう。
それに人間はなぜかこういうときは寄ってこない。
もしかしたらボク達の方が人間を避けてるのかもしれないけど、ま、判断する材料はないんだからどっちでもいっか。
「いいね、ずいぶんひどい喰いっぷりだよ。何人目？」
ボクが拍手をしながら近づくと、巫女服の少女は睨みつけながら
「……五人目」とだけ答えてくれた。
となると確信犯か。

一人目ならまだ事故としてありえる。自分を毒虫だと気付かずに未練たらたら人間に付き纏おうとするから。
だけどさすがに二人目から事故ということはない。
五人目、だなんて明らかに人を喰うことを選んだ化け物だ。だいたいこの頃には人間をアンチカテゴリにする方法を確実に知っている。
ま、ボクには一人目だろうが百人目だろうが関係ないけどね。
「なに？　あんたは選ばれた戦士なの？　それとも偽りの世界の敵？」
「うわぁ」
たまにいるんだよね。見た目だけは自分の好きにできる力を手に入れたから勝手に変な方向に解釈する属性が。
「うん、でも大当たりじゃなかったけど、ハズレでもないってとこか」
さてこの二人はどうするべきか。
このまま殺して知らぬところに埋めてもいい。いつもならそうする。
だけどこの近くにはあの人形がいたはず。だからこそボクはこの辺を彷徨っていた。
最後くらい喰われる意味を知りながら後悔して死んでいくべきか。
「？　どういう意味だ。お前も俺の炎をくらいたいわけか？」
包帯を巻いた少年がボクに拳を突きつけた。
「いやボクはキミ達の敵じゃないよ、その証拠にほら」
ボクはスポーツバックの中から分厚くなった封筒を取り出した。入ってるのは百枚くらいの紙幣。包帯の少年は中身を確かめると「な、なるほど」とあくまで平静を装いながら受け取ってくれた。
なんだかんだで化け物が生きていくにもお金はいる。これくらいで味方と勘違いしてくれるなら安いもんだ。
「さて、キミ達がアンチカテゴリになったことはもう自覚している

はずだ。ところで――キミ達は人間に戻りたいと思わないかい？」

◆

「なぁんて。別に感染源を殺したからって人に戻れるわけじゃないんだけどさ」

もしそうだったらとっくの昔にボクは人間に戻っている。

漁夫の利を狙ったつもりだったけど人形には逃げられてしまった。

エス、と名乗る存在がいる。『エス』は誰もが持っている。アンチカテゴリになったのは『エス』に強く触れたから。『エス』に強く触れれば触れるほど、今まで持っていた自分を忘れてしまう。

強く触れる方法はただ一つ。

人間としての自我を捨てること。……もともと人間としての自我を持ってない、持たされてない存在なら簡単に触れることができるかもしれないね。

そして『エス』そのものになった存在を強く想う。

こっちの方が簡単かもしれない。社会で問題になってるアンチカテゴリもこっちが主流だったりする。

そんな簡単なことで発症するなんて、ってどっかの偉い人は言うかもしんない。

簡単じゃないと意味がない。

少なくとも誰かにとっては。

あのエスを名乗る人形とは何回か殺しあったことがある。いつもいつも逃げられてばかりだ。

あいつはもう自分をエスだと思っている。

本当の自分なんか忘れてしまっている。

だから――壊すしかない。

誰かを喰うという夢を安易に見てしまう、あの禁忌の人形を。

なぜかあの人形は殺しても殺しても空気を掴むかのように逃げてしまう。

「ま、どんな理屈かはだいたいわかったけどね」
赤く何かの色のように染まった空を見ながらボクは笑った。
「いいよ、今度はこっちが喰い尽くしてやる」
ボクはバッグから携帯を取り出して電話をかけた。
『やぁかわいこちゃんから電話だ～。一人？　なんつって』
ボクは電話を切った。
すぐに携帯が鳴った。
『ひどいよミコトちゃん！　それともきゅん？　どっちでもいっか。こんなかわいい子が女の子のわけがないってね』
「ねぇ加須さん。もしかして見てたの？」
『やだなぁ、お仕事がんばってるんだからミコトきゅんのこと見守る暇なんてあるわけないっしょ。ミコトきゅんてば今日サングラスと帽子忘れていったでしょ。だからそういう目にあってるかなぁって。あってる？　あってる？』
「とりあえずそのきゅんってのやめてよ。殺すよ。できるだけ死なない方法で」
『こ、こわいっ！　ミコトきゅ……あーいやいや、ミコト。んで何の用？』
「お仕事頑張ってる？」
『んー、超がんばってる！　なんせ俺ってば仕事熱心だからねっ』
「お疲れ様。怠けると始末するから気をつけてね」
『こわっ！　やっぱりこのショタ怖いよ！』
「今のターゲット始末したらちょっと探して来て欲しい子がいるんだ」
『いーよ。どういう子』

「家出中の男子中学生で、鈴平亮一って言うんだ」

幕間・とあるファーストフードにいる子供について（後書き）

おおおうさむすぎゆうううう続きは後でうｐ鼻水が止まらない

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8608y/

ExistenceDualism ―存在二元論―

2011年11月25日21時53分発行